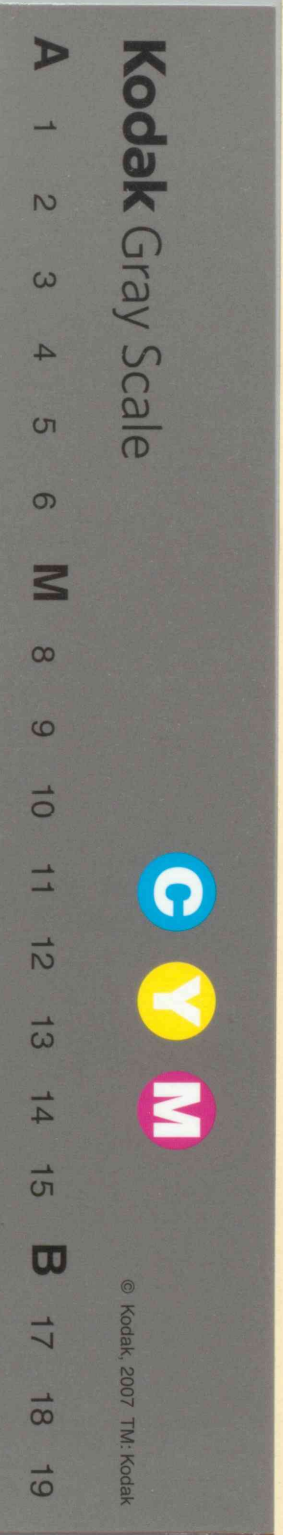
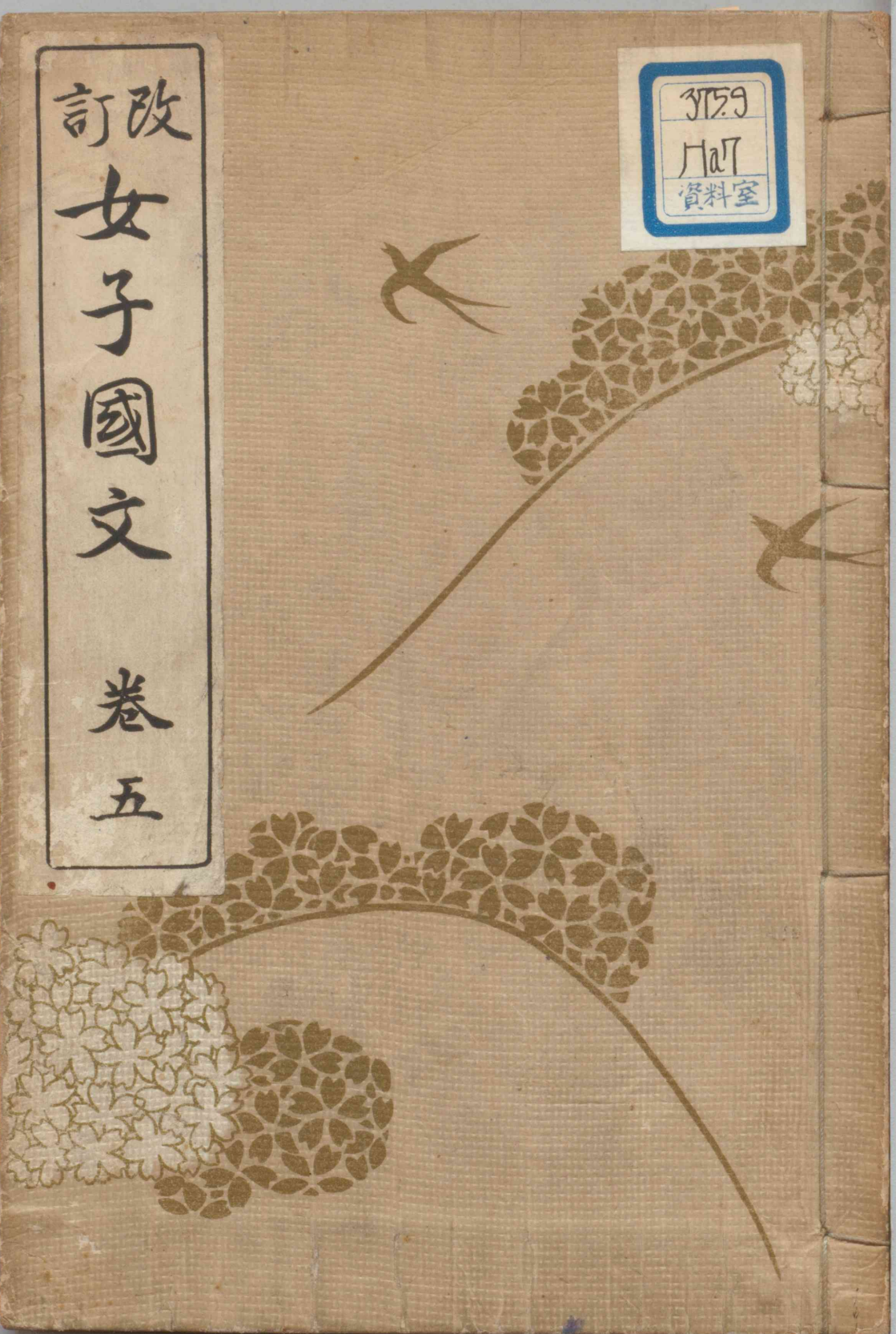


訂改
女子國文
卷五

3759
M17
資料室



C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

42169

教科書文庫

4
810
42-1922
200030
1948



375.9
Ha7

資料室

大正十一年一月十日 文部省檢定濟 高等女子學校 國語教科書

文學博士芳賀矢一編

訂改 女子國文

東京 富山房 發行



訂改 女子國文卷五

目次

- 一 明治天皇と世界の新聞……………一
- 二 明治天皇の御製……………六
- 三 ことばの話(自修文)……………一三
- 四 吉野と嵐山……………一九
- 五 池野大雅と其の妻……………二四
- 六 仁和寺の法師……………三〇
- 七 我が父母……………三四

目次

八 父母のなさけ(自修文)……………四一

九 女子服飾の變遷……………四二

一〇 春夏の歌……………四三

一一 神國の首都……………四四

一二 祖先を崇び家名を重んず……………四五

一三 マチソン夫人……………四六

一四 勤 儉……………四七

一五 醫者の來るまで(自修文)……………四八

一六 國民としての女子……………四九

一七 原總右衛門の母……………五〇

一八 舊藩の明君 其の一……………六一

一九 舊藩の明君 其の二……………六二

二〇 筑紫の旅……………六三

二一 漆 器(自修文)……………六四

二二 夏の草花……………六五

二三 植物と氣象との關係……………六六

二四 愛すべき夏……………六七

二五 狂 歌……………六八

二六 十訓抄と著聞集……………六九

二七 平等院……………七〇

二八 税所敦子君の棺の前に誄す……………一三

二九 春の七草と秋の七草(自修文)……………一六

三〇 秋夜……………一四

三一 淑女とは何ぞ……………一四

三二 空行く雁……………一五

三三 交際と文學の趣味……………一六

目次終



改訂女子國文卷五

一 明治天皇と世界の新聞

萬口一致
盛徳大業

明治天皇の崩御あらせらるゝや、世界各国の新聞紙は萬口一致哀悼の辭を掲げ、其の盛徳大業を稱へ奉れり。左に掲ぐるは崩御當時發行のロンドン・タイムス及びモーニング・ポストの一節なり。

陛下の御治下に、日本は幾百年間窳^{きん}束^{そく}せられつゝありたる桎梏^{しごく}を打破し、進んで世界列強國の間に堂々たる武備を

牢乎として
抜くべから
ず

脚下に拜跪
せしむ

光彩陸離

整へ、牢乎として抜くべからざる地歩を占有したり。陛下は
其の發端より此の大業に參與し給ひ、これを正路に指導す
るの任に膺あたらせられ、かくして遂に東洋史上磨滅すべから
ざる御自身の記録を留めさせ給へり。陛下の御治世中、日本
は嘗に驚くべき國內の大維新を遂行したるのみならず、更
に舊邦支那をして其の脚下に拜跪せしめ、かつ一時は歐洲
列強中の最も尨大にして、かつ最も尊大なる一國をも征壓
したりき。日本は將來に於て如何に發展すとも、日本が先帝
御治下に於て成功したる如き光彩陸離たる幾多の偉業を、
陛下の爲させ給へる如き短期間を以て成就せん事は、到底
望むべからざる所たり。かゝる渾身の御努力と剛毅なる御

傀儡

居常仲々

意志とを以て、克く其の臣民を鼓舞激勵し得給ひたる君主
は、決して一箇無爲の傀儡くわいらいにあらざりき。しかも、戦勝の諸將
帥が、常に其の勝利を以て君主の御稜威に歸するを例とす
るに拘らず、世上の稱揚に對して、未だ曾て何等名譽の分配
に與らんと欲し給はざりき。凡そ偉大なる元首にして、未だ
陛下の如く恭謙遜讓の美德を守らんとして、居常仲々たる
御方はあらざりき。其の臣下は忠實に陛下に奉侍し、而して
陛下も亦能く之を認知し給ひたり。其の一たび他を信任し
給ふや、永久に渝らせ給ふこと無かりき。惟ふに先帝陛下の
成功の御秘訣は、近く奉侍したる忠實にして賢明なる一團
の人士を全然御信賴あらせられ、敢へて猥に彼等の爲す所

好箇の模範

に干涉し給はざりし一事に存したるならん。東洋に於ける最初の立憲國の君主は、又克くあらゆる立憲國君主の爲に好箇の模範たるを得べし。(ロンドン)

顯赫

日本の第二百一十一代なる天皇陛下の崩御は、近代世界に於ける最も偉大なる帝王の御一方を拉し去りたり。而して日本は古來其の皇位を輝かしたる最も顯赫なる元首中の一つを失へり。有史以來、幾多の帝王は生れて其の邦土を統治し、而して一切の生物と等しく次第に凋落し了れり。然れども歴史ありてより以來、何れの帝者も未だ曾て斯の如く普遍にして深厚なる悲嘆の中に、且斯の如く稀有なる愛國心と信仰心との光景の中に、其の玉笏を遺して登遐せし者

玉笏を遺して登遐す

僻陬

内帑

限局

あるを見ずと斷言するも可なり。

國內何れの場所にも、假令僻陬の地と雖も、災厄の生ずる毎に、必ず陛下の内帑は衆に先んじて罹災民救濟の爲に開かれたり。皇室の仁慈は曾て限局する所なく、はた毫も階級の區別を認めさせられざりき。これを往時と比較せば、先帝御統治の下なる日本は、暗黒に對する白晝の光明なり。嗚呼、實に先帝は御身を以て其の最も優麗なる詩篇陛下には多數の御製ありの、一つに詠出し給ひたる其の精神を實現し給へり。

照るにつけ曇るにつけて思ふかな

わが民草の上はいかにと。(モリス)

二 明治天皇の御製

さし昇る朝日の如くさわやかに

もたまほしきは心なりけり

四方の海皆はらからと思ふ世に

など浪風のたちさわぐらん

しら露のおきふし毎に思ふかな

民の草葉のさかゆかん代を

おのがじし務を終へし後にこそ

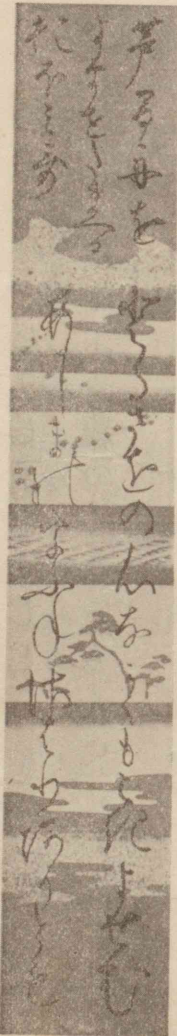
なりはひ

華間舟を
よませた
まへるお
ほみ歌の
とるさを
心ながく
こぎよせ
あしよの
ぶねさほ
ありとも

花の蔭には立つべかりけれ

おのが身を修むる道は學ばなん

賤がなりはひ暇なくとも



明治天皇御製
昭憲皇太后御筆

子らはみな軍のにはに出ではてゝ

おきなやひとり山田もるらん

おもほえず夜を更しけり國の爲

たふれし人の物がたりして

たらちねの親の心を慰めよ

國につとむる暇ある日は

獨立つ身となりし子を幼しと

おもふや親の心なるらん

荒磯の松の木蔭にしほ風を

よきても咲ける山櫻かな

すゞしくも月の光になりけり

波の洗ひし濱のまさご路

長くなりまどかになりて蓮葉に

まろぶも涼し露の白たま

わたの原追風をうけて行く船の

片帆にかゝるゆふだちの雨

政いでて聽く間はかくばかり

あつき日なりと思はざりしに

よりそはん閑はなくとも文机の

上には塵をすゑずもあらなん

風調

なければならぬ。

日常の御慰安の爲にお詠み遊ばされた數々の御詠、其の風調は高く、規模は大きく、如何にも萬世一系の帝祚を踐ませ給ふ上御一人の御作と窺はれる。國を思ひ、民を憐ませ給ふ大御心は、常に御製の上にあらはれて居る。一首の歌が、米國大統領(1)ルーズヴェルト氏を動かして、講和仲裁に盡力させる動機となつたといふ御逸話の如きは、三十一文字の和歌が、千萬の兵馬にもすぐれたる力を示したもので、和歌始つて以來、未曾有の事である。まして七千萬の國民が日常拜誦して、自然に蒙る偉大な感化に於ては、何等の經典も之に並ぶものは無い。日々の御慰が直ちに國民教化の源泉とな

(1) Roosevelt.

動機

經典

森嚴雄大

典範

玉の御聲
草莽の微臣

(1) 文學博士。
變遷
り。つりは

る、これ程の貴さが、何時の世、何所の國にあらうか。

明治時代の詔勅は森嚴雄大ながく國史を照して、後世の國民に聖代を語り、典範を示すのである。併し詔勅にはそれぞれ、の形式があり、聖意を承けて起草する人のあることも明白である。御製は直ちに大御心の發したもので、之を拜誦するものは、即ち直接に玉の御聲を拜聽するのである。草莽の微臣まで、日々玉の御聲を拜聽するの光榮を有するのは、實に我が國民の特殊な幸福である。

自修文

三 ことばの話

(1) 佐々 醒雪

不思議なものは、ことばの變遷である。日本語は幸にして二千

二千年云々
記録に明らか
に二千年も前
に於てあると
書いてある。

世紀
一世紀は百年
間をいふ。

主長
しら。
一桓武天皇が延
暦十三年京都
に都せられた
から平氏の
滅亡までの
期間をいふ。

年近い記録を存してゐて、世界で頗る古い言語の一つである。而も萬世一系の帝室を戴いた同一民族の間にのみ發達したので、今から約千年前に出來たといはれる「竹取物語」や「伊勢物語」を見ても、半分以上は、今日も平生使用してゐる言語で出來てゐる。こんな國はいふまでもなく、世界中に又とはないのである。一千年前即ち十世紀前といへば、今の歐洲列強國などは、皆全くの野蠻國であつた。かく久しい時代を経てゐるから、同じ語でも、その意味は頗る變化したものが多し。

例へば、甚だしく變遷したものは「いへ」といふ語であらう。昔は「いへ」といふと、家族とか家庭とかいふことで、隨つて「いへあるじ」といへば、一家族中の主長で、即ち戸主のことであつた。然るに今日家といふと、家屋即ち建築物のことで、「いへぬし」は貸家の持主の義に用ひられてゐる。更に甚だしく變化してゐるのは、形容詞などに多い。例へば平

薄倅者
もの。
ふしあはせの

一平安朝末の
頃から武士の
勢を得た時代
をいふ。

安朝の人が「あはれなる人」といふと、大抵は美人のことである。我が貧民や薄倅者を「あはれなる人」といふのとは、雲泥の違ではないか。「かなし」といふ語も、今日では悲哀の義にのみ使ふが、古は極めて寵愛してゐる妻や子のことを「かなしき妹」とか「かなしくする兒」とかいつた。

かゝる變遷は、そんなに古い時代ばかりではない。漢語が頻に用ひられ初めてからも、同様の變化は認められる。例へば「不用」といふ語は、今日では「入用でない」といふことであるから、紙屑買が「御不用物は御座いませんか」と呼んで來る。然るに中古では「不用なる者」といふと、用ふるに堪へぬ頓間か痴呆もののことと、更に降つて武家時代に入ると「爲朝が不用であつたから、父爲義が九州に追つた。」などと記してあつて、不用といふのは、いたづら者又は無法者の義である。鎌倉時代に「不用なものは御座いませんか」と呼歩いたら、「いたづら者はないかね」と呼歩く鼠取藥と間違へ

語源 ことばのも
 矛盾 つつまのあはぬこと。前後でしよとつすること。
 漢方醫 支那流の醫者。
 列舉 ことごとくあげること。
 抹茶 製茶を茶臼してひいて粉にしてたもの。湯をさして飲む。

られたであらう。
 これ等はまだ單なる變遷で、中にはその變遷の間に、語源の意義に對して奇怪なる矛盾を生ずることもある。漢方醫が廢れて藥を煎じることがなくなつても、藥罐といふ名は残つてゐたり、其の他不思議な言葉を列舉すれば、際限もないが、就中奇代なのは「茶碗」や「さかな」である。
 日本でまだ立派な陶磁器の出來ぬころ、支那から渡つて來た上等の陶磁器は、専ら抹茶の席ばかりに用ひたから、これを茶碗といつたのである。然るに日本で硬い上等の物が澤山出來るやうになると、御飯を食べるにも、番茶を飲むにも陶磁器を用ひはじめた。そこで飯食茶碗とか、茶飲茶碗とかいふ不思議な語が出來た。今日では珈琲茶碗とさへいつてゐる。茶を飲むのが茶碗なら飯を食ふのや珈琲を飲むのは飯碗、珈琲碗とでもいひさうなものだが、さう理窟通りに行かないのが言葉である。

副食物

異名 別の名。
 下戸 酒のきらひの者。

「さかな」とは、本來酒を飲む時に食ふものといふ語である。「さか」は「酒樽」「酒盃」の「さか」である。「な」は何でも副食物にするものこと。古は野菜類は勿論皆なであるし、昆布や若布などの様な食べられる海藻は、皆磯菜といつた。それから魚類は「な」のなかの上等のものであるから、上等な建築用材を「ま木」といひ、屋根を葺く上等の草を「ま草」といふやうに、これを「まな」と稱へた。今の「まな板」「まな箸」などいふ語は、これから來てゐる。然るに酒といふものは、上戸即ち上等の家でなくては飲用しないし、且酒を飲む時は、今も昔も贅澤な副食物を求めることが普通であるので、自然魚類は酒席に多く供せられて、「さかな」といふ異名を得るやうになつた。既に魚類が「さかな」といふことに定まつてしまふと、下戸が食つても、やはりこれを「酒な」といふのは、飯を食つてもやはり茶碗といふのと、同じ不思議である。
 言葉は又使つてゐる中に、段々下落するものである。例へば「大

工藝 工作上的藝術
 俊秀 すぐれてひいでて居るこ
 統領 まかしら。あた
 たづさはる 関係する。従
 叩き大工 へたな大工。下級の
 轉訛 ことばりなる
 江戸歌舞伎 江戸で行はれた芝居
 故意に わざと。
 人爲的 人の力ること
 變造語 つくりかへたことば
 奉仕

工といふ語は、工即ち工藝家中の俊秀なものの尊稱で、多くの小工どもの統領を呼ぶ名であつた。然るに今日では建築事業にたづさはるものは、小屋掛の叩き大工でも、やはり大工である。かの棟梁親方なども同様で、今日では、一人の手下もない、子分のない男でも、印紳纏さへ著てゐれば、即ち親方であり、棟梁である。最後に一つ故意に轉訛せしめた例を示さう。言語の變遷は大抵自然のものであるが、江戸歌舞伎などには、故意に作つた人爲的の言葉がある。一時兵隊言葉といつて、一本橋を獨木橋といつたり、一軒家を獨立家屋といつたりしたこともあつたが、今ではそれも廢止されたやうだ。その他には迷信から來た變造語が少ある。例へば海邊に生えてゐる蘆といふ草を「惡し」と聞えるといつて、わざと「よし」と呼びかへたり、四を「死」と通ずるので「よ」といつたり、梨を「ありの實」硯箱を「あたり箱」錫を「あたりめ」といふ類が多少は行はれてゐる。古も伊勢の大神宮に御奉仕になる齋宮の

おつかへ申す
 齋宮 いづきのみや
 女も大神宮にお仕へになる方のこと
 窮極 きはまるところ。さいげん。至當
 あたりまへ。もつとも。

香雲遙かに
 たなびく
 (一)大和國吉野郡に關す。早く農業集に歌あり。

御所では、髪のない僧侶をわざと「髮長」などといつた例もある。要するに、言語界の不思議な現象は、同一の語が例へば髮長といつて髮のないことを顯すやうに、正反對の意味にさへ用ひられるのであるから、その變化は蓋し窮極を知るべからずといふのが至當であらう。

— 醒雪遺稿 —

四 吉野と嵐山

藤岡作太郎

吉野は奈良時代以前より歌にもよまれて、名高き所なるが、初は吉野川の清き流を賞して、水邊に離宮をも設けられしなり。香雲遙かにたなびきて、日本一の花の名所といはれしは、平安時代此の方なるべし。

吉野川を渡れば六田の里あり。此より坂になりて吉野山

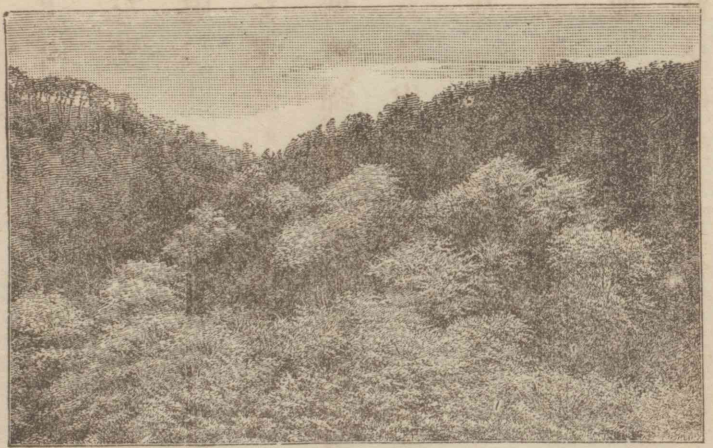
千朶萬朶
(一)これはく
とばかり花の
吉野山(安
原真室)

(二)歌書よりも
軍書に悲し吉
野山(各務
支考)
(三)天武天皇。
(四)護良親王。

に入る。奥の院まで二里餘の間に、櫻の多き所、下と、中と、上と
三箇所ありて、稍開落の時を異にす。下の一目千本最も壯觀
なり。總じて吉野は、馬の背のやうなる山の上に町ありて、そ
こより谷の櫻を見下すなり。花は一重の山櫻にて、赤き若葉
の間に優しく瘦せて咲く。肥えて派手なる姿はなけれど、千
朶萬朶、山一杯に咲き満ちたるを望めば、古人の「これはく」
と驚きしも理なりと頷かる。

吉野の花盛を賞めたる詩歌は數へも盡されねど、此の山
は又歴史上の舊跡として、遊人の心を動かし、(二)歌書よりも軍
書に悲し、といはれたり。大海人皇子がこゝに潜み給ひしを
始として、義經主従は嶺の白雪に蹈迷ひ、大塔宮の軍敗れて、
(三)

(一)山寺の春の
夕暮來て見れ
ば、入相の鐘
に花ぞ散りけ
る。(新古今)
集、能因法師
(二)古陵松柏吼
天聰。山寺尋
雪老僧時。鞍
帶。落花深處
井竹外。



本 千 日 一

村上義光父子は春の花と散り
ぬ。其ののち吉野時代の皇居と
して、至尊が山里の御起臥、いか
に心苦しくまし〜けん。(一)山寺
の春の夕暮來て見れば、春寂寥
にして、老僧帚の手をやめて、落
花深き處に昔語をするもあは
れにこそ。

吉野の花に惜しむべきは、水
の眺のなきことなり。吉野川程
近く麓を走れども、花の山より川は見え、水の邊に花は無

(一)大堰川上流の津村より山城の間をいふ。

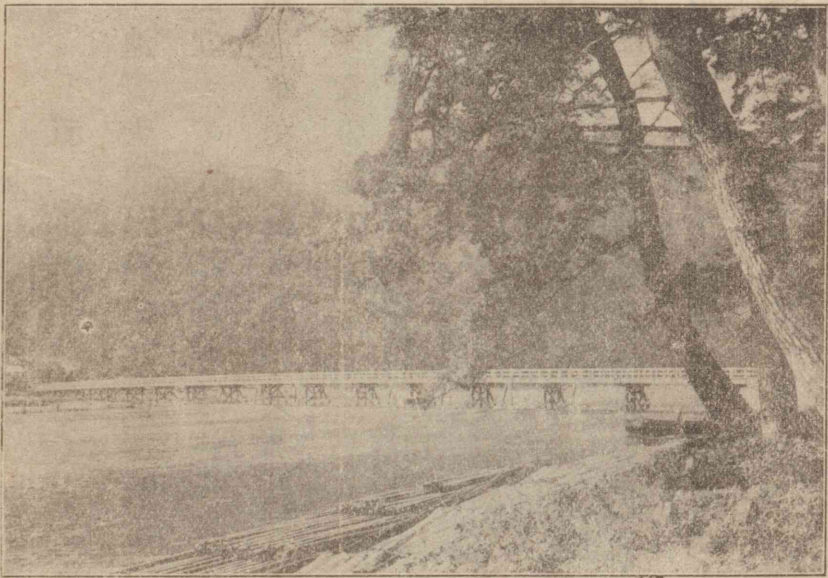
いやが上

し。隅田河畔の向島は、花と水と長く相沿ひたれども、山を見ず。山と花と水と共に備れるは嵐山なり。(一)保津川の流深く山を劈きて、丹波より山城に入る。其の峽の將に開けんとする處に此の山あり。山は覆りて淵に墜ちんとし、水は衝いて麓を穿たんとす。松の翠いやが上に茂りたるなかに、花の雲、紅葉の錦、畫よりも美しく、夏の涼みにもよろしく、雪の降りたるは尙更おもしろく、四季の景色、いつとして佳ならざるはなし。

二第八十八代。
三山城國葛野郡、太秦附近より以西嵐山に至るの況

嵐山の櫻ももと吉野の種なり。平安時代にもすでに此地はたぐひなき勝地として知られしが、其の頃はなほ秋の紅葉ばかりを賞したりしに、後嵯峨天皇の嵯峨に離宮を設

(一)靈龜山と號す。山城國葛野郡、嵯峨村大字天龍寺に在る。



嵐山

けたまふに及びて、そこより眺めまたはんがために、吉野の櫻を對岸の嵐山に移し植ゑさせたまひしなり。其の離宮は後に禪寺に變りぬ。(一)天龍寺これなり。

—新體國語讀本—

(一)畫家。安永五年(二四三六)歿。年五十四。

五 池野大雅と其の妻

池野大雅は京都祇園のほとりに住まつてゐたが、急に思ひ立つて大阪へ行くといつて、無造作に家を出て、建仁寺の前邊まですたくくと來かゝると、不意に後から「もしく」と呼ぶ女の聲が聞えた。

焉んぞ知らん

振返つて見ると、息を切らして追つかけて來た女が、額の汗を拭ひながら、無言で一束の筆を差出した。はつと思ふと、そゝつかしい彼は度を失つて、幾度もそれを頂きながら、「これは何處の御婦人か。よく拾つて下された。」と夢中で禮をいつて、其の儘すたくくと歩き出した。焉んぞ知らん、筆は我が家に忘れて出たのを、後でそれと發見した妻の町子が、驚い

て後から届けたのであつたが、無頓着な夫がそれと氣のつかない様子を見ると、町子も亦無言で其のまゝ引返した。似



池野大雅筆

た者夫婦で、どつちも劣らぬ變り者であつた。

大阪へ出た大雅は、既に當時の大家

引張風

狂げての頼み

であるから、禮を厚うして、八方から引張風のやうに招待を受けた。其の中に大和屋某といふ豪商、町人ながら大雅の名を慕うて、店の暖簾を是非とも先生に書いて頂きたいと狂げての頼みに、無造作な彼は快く承諾して、早速例の筆を携

適勁

へて同家へ赴いた。

下へも置かぬ歡待を斥けて、直ちに揮毫の準備をさせると、主の需めは「大和屋」といふ屋號の三字を、大書してくれといふのであつた。五歳の年に黃檗山の衆僧を駭かした彼の筆勢は、年と共に適勁を加へて、立所に龍蛇の躍るが如く、まづ「大和」の二字が成つた。すると急に、何を思ひ出したか、彼は突然筆を擱いて座を立つた。どうなされましたか。「いや少し」といふかと思ふと、不意に座敷を出たまゝ、忽ち姿は消えてしまつた。

初は厠へでも立つたものと、別に氣にも留めなかつたが、何時まで待つても歸つて來ぬので、不思議と家中を捜させ

皆目

神隱

けろり

呵々

矢も楯も堪らぬ

だが、影も形もないので騒ぎとなり、人を八方へ出して見たけれども、皆目行方は知れなかつた。大雅先生が神隱に遭つたと、奇怪な風説が立つてから五日目、けろりとして大和屋の暖簾を潜つた當人は、大口をあいて呵々と笑つた。何の。大和と書いて見ると、ふと吉野のことが心の中に浮んだ。今頃は一目千本が満開であらうと思ふと、矢も楯も堪らぬので、ちよつと花見に往つて來た。併し幸に間に合つてよかつた。大和屋の人々は、呆れて眼を睜るばかりであつた。大雅は平氣で墨を磨直させて、残つた「屋」の字を大書した。

彼は何時も清貧に安んじ、家にあつてはよく三絃を取出して、錆びた喉に古曲を唄つては楽しんでゐた。妻の町子は

錆びた喉

(一)歌人梶女に養はれ、亦歌名あり。歌集を百合遺集といふ。

又筑紫箏の名手で、夫と一緒に合せ物などをして、睦まじい家庭を造つてゐた。

町子は、祇園林の茶屋百合の女で、夫を見習ひ、畫をもよくして、玉瀾と號した。

或時玉瀾は夫と一緒に冷泉殿の邸へ上つた。

冷泉殿は和歌の家、此の卿に見えるのは、旁以て敷島の道を學びたい爲でもあつた。玉瀾の名は豫て聞く、どんな雅びな女かと、御内の女房達は争つてこれを垣間見ようと犇めいた。豈圖らんや、大雅が連れて邸の門を潜つた女は、糊の硬い木綿着物を纏うて、手には魚の籠を提げてゐた。とんと草鞋を穿かぬ大原女の様でござんすなあ。はしたない女房達

とんと

物堅い

謝物

添削す



玉瀾筆

人の許へ始めての入門に際して、季節の謝物を携

へることを忘れなかつたのであつた。

殿の卿は其の心を喜んで、歌は總べて心を以て基とする。そなたの歌も、其の氣象に合ふやうに添削して取らす。と仰せられた。面目を施して、目通りを下つた彼女は、其の後も

畸人

屢、詠草を携へて、卿の門を潜つた。
畸人の夫にふさはしい妻、而も家庭圓滿に、一生連添つた大雅に先立れて後の玉瀾は、形見の三絃に合すべき箏の調べも空しく、清く淋しい孤獨の餘生を送つてゐたが、夫に別れて九年目、天明四年の九月、溘焉として其の後を追つた。

——本山荻舟、名人畸人による——

六 仁和寺の法師

吉田 兼好

一 石清水

(一)京都市の西郊花園村にあり、宇多法皇の創建、俗に御室といふ。かちより詣づ。

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ心憂くおぼえて、或時思ひたちて、唯一人かちより詣でけり。

(二)共に石清水の麓にある末寺。かばかり

極樂寺、高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて傍の人に逢ひて、年ごろ思ひつる事果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも参りたる人毎に山へ登りしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へまゐるこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。とぞいひける。すこしの事にも先達はあらまほしきことなり。

二 鼎

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名残とて、おのゝ遊ぶことありけるに、酔ひて興に入る餘り、傍なる足鼎をとりて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔を差入れて舞出でたるに、満座興に入るこ

かづく

たゞ腫れに
腫る

と限りなし。しばし奏でし後、抜かんとするに、大かた抜かれず、酒宴ことさめて、いかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うち割らんとすれど、たやすく割れず、響きて堪へ難かりければ、叶はずべきやうなくて、三足なる角の上に帷子を打掛けて、手をひき、杖をつかせて、京なる醫師のがり率て行きけるに、道すがら人の怪しみ見ること限りなし。醫師の許に差入りて、向ひ居たりけん有様、さこそ異様なりけめ。物をいふにも、くゞもり聲に響きて聞えず。かゝる事は書にも見えず、傳へたる教もなしといへば、また仁和寺に歸りて、親しきもの、老いたる母など枕上により居て泣き悲しめ

くゞもる

ども、聞くらんとも覺えず。かゝる程に、或者のいふやうは、たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりは、なか生さざらん。力をたてゝ引き給へ。とて、藁の蒂ついでをまはりに差入れて、かねを隔てゝ、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻かきうげながら、抜けにけり。からき命まうけて、久しく病み居たりけり。

三 木のぼり

高名

軒だけ
目くるめく

高名の木のぼりといひし男、人をおきてゝ、高き木にのぼせて、梢をきらせしに、いと危く見えし程はいふこともなく、て、おるゝ時に、軒だけばかりになりて、あやまちすな。心しておりよ。と言葉をかけしを、かばかりになりては、飛下るともおりなん。如何にかくいふぞ。と申しければ、その事に候。目く

下藤

るめき枝危き程は、おのれがおそれ侍れば申さず。あやまち
は安き所になりて、必ず仕ることに候。といふ。あやしき下藤
なれども、聖人の戒にかなへり。鞠もかたき所を蹴出して後、
やすく思へば必ずおつとあるやらん。
——徒然草——

七 我が父母

新井白石

われ物の心を辨へしより此の方の事は覚えしに、父が日
日の事唯同じさまにして、露たがふ所おはせざりけり。寅の
時ばかりには必ず起出で給ひて、水をもて身を洗ひ滌ぎて、
自ら髪取上げ給ひき。夜寒き頃は、母にておはせし人の、我も
齡の傾きぬれば、夜寒に堪へず。とて、圍爐裏に火をうづみて、

罐子

下部

それに足さしふし給ひて、罐子に湯を入れて、火の邊にさし
置いて、父起出で給ふ時に、其の湯を參らせられたりき。
二人ともに佛の道をたふとみ給ひしが、父にておはせし
人の、髪取上げはてゝは、衣裳あらためて佛を禮し給ふこと
曉毎に怠り給はず。父母の忌日には、手づから飯を炊きてす
すめられ、下部等に命ぜられし事あらず。夜いまだ明けざる
程は、坐してあしたを待ちて、夜明けはてゝ出仕し給ふ。父の
おはせし所は南にありて、出仕し給ふべき門は北にありし
に、朝には東よりし、夕には西より道し給ふ。雪踏とて革を底
にしたる物を召して、いかにも足音の高らかに聞ゆるやう
に過行き給ひしかば、我が父の來り給ふは、皆人の聞知りし。

喜怒の色

たち居かろ
がろしから
ず

程に、幼き子も其の啼をとどめたりき。
我が物覚えしよりは、髪に黒き筋は少かりき。面は方にお
はしまして、額上高く起り、眼大きく、鬚多く、たけは短くおは
せしかど、すべて骨太く、逞しく見え給ひたりき。天性喜怒の
色あらはれ見え給はず。笑ひ給ふにも、聲高く笑はせ給ひし
事は覺えず。まして人を叱り給ふには、あらくしきことを
宣ひしことを聞かず。もの宣ふ事も、いかにも言葉少くして、
たち居かろしからず。驚き給ひ、騒ぎ給ひ、事に堪へかね
給ひしなどいふ事は見し事あらず。たとへば、灸治などし給
ふにも、灸小さきと、數少きとは無益の事なり。と仰せられて、
大きな灸を其の數少からず、五所も七所も一時にすゑさ

日を消す

色を設く

せて、痛ませ給ふ氣色も見え給はず。

身靜かなる時には、常におはします所を淨く掃ひて、壁上



石白

に古畫をかけて、花瓶には春秋
の花を少しく挿みて、それに對
して黙坐して日を消し給ひ、又
自ら繪かき給ふ事などもあり
き。それも色を設けたる繪など
をば好み給はず。身の病み給ふ
時より外は、人を召して使ひ給ふといふ事なく、何事も皆手
づからなし給ひたりき。朝夕の物をめすことも、飯は二碗を
過ぎず。手して椀をさぐるに、其の輕重によりて、飯の多き

互に相制す

少きは知れぬれば、其の餘物は、飯の多少によりて、多くも少くも食ひて、常に我が腹に満つる分量を過すべからず。口にかなふ物なりとも、一色をのみ多く食ひぬれば、必ず其の爲に傷めらるゝ事あり。何物をも擇ばずして、皆々少しづつ食ふ時は、互に相制する所あるにや、食の爲に傷めらるゝことは少しと覺ゆるなり。」と仰せられき。

世の常には、こなたより參らする物をめして、何物を參らせよと宣ひし事はあらず。たゞ「四時の新味をば、其の出で來りし初に、何物に限らず參らせよ。」と仰せられて、家人と共に聞き召しけり。

酒は僅かも喉に下し給へば、大きに酔ひ給ひしかば、唯盃

歡を受く

身におふ

を把りて、歡を受け給ふのみなりき。茶をば好みてめしけり。身にめしける物も、家におはする時は、洗ひ濯ぎし物をもめしけれど、垢づきぬるをば、いね給ふ時もめすことなく、門を出で給ふに至つては、必ず新しく鮮なる物どもをめす。それも身におひ給はぬ品の物用ひられし事はあらず。むかし人は、常に身死しなん後の見苦しからぬやうを心にかけてしなり。など宣ひたりき。扇子などを、人多き中に取りも落し、遺れもすることあり。これらの物にても、其の主の心は推量らるゝことなり。」と仰せられき。

我が母にておはせし人は、ものよく書き給ひしのみにあらず、歌の道をも傳へ習ひて、代々の集、又は物語の類など、我

が姉妹に讀教へ給ひ、圍碁、將碁なども堪能におはして、これらの事をも我に教へ給ひたりき。香爐箱のうちに、琴の爪を袋にして入れおかれしを見し事あれば、これ等の事をも好き給ひしにや。我が見まゐらせしよりは、織り縫ふ事こそ女の業なれ。と仰せられて、年毎に美しき筋の布と、いろ／＼の文ある絹をみづからも織り、人にも織らせ給ひ、それを父にもめさせ參らせ、我にも賜はりしが、今も少しは家に残りり賤しき者の言葉に、似たる者の夫婦とはなるなりといふ事のあるが、もの宣ひ、爲し行ひ給ふ事どもの、父にておはせし人にたがふ所なくてぞおはしましたりける。父の致仕し給ひし後には、これも髪おろし給ひて、佛の道をいみじく行ひ、

致仕

いみじへ

六十三にて終り給ひき。

— 折りたく柴の記 —

自修文

八 父母のなさけ

柳澤 淇園

(一)名は里恭。大和郡山の人。文武両道に達した。多藝であつた。寶曆八年(二四一八)歿。年五十六。稿成る文章が出來上る。座右すわつて居る席のちかま。さりとしてはいかい。自分のがまづまりだ。どういふわけか。小袖袖のある普通の着物。餘事そのほかの事。ひたぶるに。水仕のわざ。水しこと。

余はいとけなき頃より詩歌の道を好み、たま／＼作文などせし折から、稿成りて父に見するに、一として褒められたることなく、只無益の事なり。とて座右に投捨て置き、他の者のは褒めさせ給へば、さりとしてはいかゞとのみ思ひ過し、が、後に妻に迎へたる女の、物縫ふことの人に優れて、小袖など一日に一重づつ縫ひて、餘事までも、事缺かず、物縫ふ職人の見ては、驚くばかりに上手なりければ、余或時、物縫ふことをひたぶるに愛で賞しける折、妻のいふ、三歳にして母に後れ、繼母に育てられ、五六歳より水仕のわざを勤め、七歳より、手習、物讀、裁ちぬひを教へられ、『實の子ならねば教訓足らじと、末に至りて誇られんは口惜し。』とて常に厳し

えせで
する事も出来
ないで。

(一) 淇園が長年書
き集めたもの
をまとめた書
物。

かりし故、羽根つく遊だにえせて、只物縫ふ事などのみに暇なかりつれば、折からは劇しき母よと思ひしかども、今となりては、物縫ふわざの人に褒められ侍るは、偏に繼母の情薄からざる慈愛なり。といへるを聞きて、余がいとけなき頃の作文を褒められざるの、いとありがたきを思ひ合せぬ。

—雲萍雜誌—

九 女子服飾の變遷

太古より今日に至るまでの女子の服飾の變遷は、詳に之を述べんこと容易の業にあらず。今簡單に其の大要を言はん。

上代の女子は髪を束ねて後方に垂れたり。衣服は筒袖の上衣に禪したらいひを穿つ。上衣は丈短くして膝頭の邊に達し、禪は太

領布



平 安 時 代

領布かをかけ、腰には裳を纏へり。禪は皆左衽なりき。材料には荒妙とて麻、葛、楮等より作れると、和妙とて絹より作れるとあり。

三韓、隋、唐の文明を傳へし後は、材料も華美に赴き、錦、綾、紗の如き物を用ひ、刺繡も進歩し、女子は太く長き筒袖の上に唐衣たういを着、衽は右衽に

改れり。平安朝に入りて、貴女の服装は所謂十二單じふにぼんとなれり。十二單とは內衣、緋袴、單、五衣いつ、ごい、紅の打衣うちぎ、表着、唐衣裳からぎを取重ねたるをいふ。五衣は五つに限らず、幾領にても重ねたり。之を正装の服とす。平服には唐衣裳を着けず、表衣の上に小袷こあじを着たるのみ。之を小袷姿ともいへり。百人一首の繪を見れば、此の二種の區別を認むべし。宮女の服装は近代に至るまで大變化なかりしが、武家の女流の服装には、小袷を用ふる事やみて、小袖を着、其の上になうちかけ又はかいどりを着る事となれり。庶民は男も女も袴を着くること次第に廢れぬ。

徳川三百年の昇平こそ、女子服装の上にも様々の變遷をあらはしつれ。其の初世には、衣服も裾長からず、袖も短くし

庶民 昇平

摺箔

て七八寸に止り、華美なるものは山水花鳥の大模様を摺箔すりばくにて現せしが、後には金糸を以て縫へり。元祿の華美なる時代を経て、袖の長さ次第に延び、後には一尺五六寸にもなりて、振袖といひて喜べり、帯も初は二三寸幅なりしが、後には八九寸に



徳川時代

及び、金襴、緞子、綸子、琥珀、天鵞絨等、外國輸入品をも多く用ふるに至れり。帯の結方にも様々ありて、時々の流行を成せり。女子の髪を結ふことも徳川時代に始りて、時々の流行變遷

九 女子服飾の變遷

四五

笄

は、一々枚舉に違あらず。今日最もひろく行はるゝ丸鬘、島田、銀杏返、唐人鬘の如き、皆幕政時代の遺風なり。笄、簪の如き皆之につれて、變遷あり、種類あり。

とや言ふべき

明治維新の後、男子は頭の鬘を切り、洋帽をかぶり、洋服を着ること日一日と多くなりしが、女子の風俗は尚舊きを守りて、年々の趣味にこそ流行の差はあれ、髪形も、服装も、なほ昔時の面影を留む。女子の洋装は今なほ男子の洋装の如く多く行はれず。女子が參内の禮服として袴を用ふること、大正の即位大禮より盛に行はれて、反りて復古の觀を呈せり。唯最近二十年來束髮の流行甚だしく、都鄙を風靡するに至りしは、繁劇にして簡便を尙ぶ社會生活の影響とや言ふ

べき。されど其の上に西洋流のハット、ボンネットを用ふること絶えて無し。

一〇 春夏の歌

在原元方^(一)

かすみたつ春の山邊は遠けれど

吹きくる風は花の香ぞする

讀人知らず

さくら狩雨はふり來ぬ同じくは

濡るとも花の蔭に隠れん

源雅兼^(二)

^(一)業平の孫。醍醐、村上天皇頃の人。

^(二)康治二年（一八〇三）歿。年六十五。

(一)古今集の撰者。本書卷二の二三課を見よ。

しのめ

(二)太政大臣。後京極と稱す。建永元年(一一八六)歿。年三十八。

(三)堀川、鳥羽、崇徳の三朝に仕ふ。

かぜふけば波のあや織る池水に

絲ひきそふる岸のあをやぎ

紀貫之

なつの夜のふすかとすれば時鳥

なく一聲にあくるしのめ

藤原良經

うちしめりあやめぞかをる時鳥

鳴くやさつきの雨の夕ぐれ

源俊頼

かぜふけば蓮の浮葉に玉越えて

涼しくなりぬ日ぐらしの聲

藤原公經

(一)從一位太政大臣。寛元二年(一一九〇)歿。年七十四。

(二)島根縣松江市。

脉搏

一一 神國の首都

小泉八雲

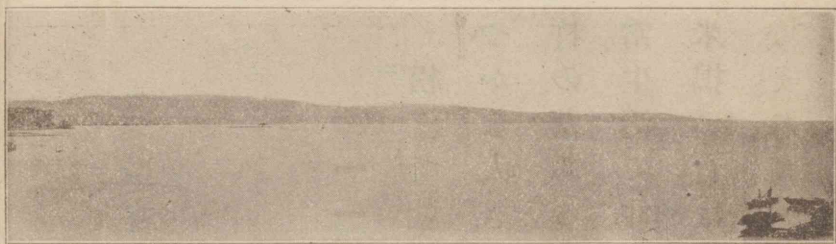
つゆすがる庭の玉笹うちなびき

一むらすぎぬゆふだちの雲

(二)松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底でゆるやかな大きな脉が搏つやうに響いてくる米搗の音である。杵の落ちる響が一定の拍子で洩れてくるのが、日本人の日常生活に伴なふあらゆる音響の中で、最も哀れに思はれる。米搗の音は日本といふ國土の脉搏である。それから禪刹洞光寺の大きい鐘がゴーンと響いて、市街

勤行

杳乎

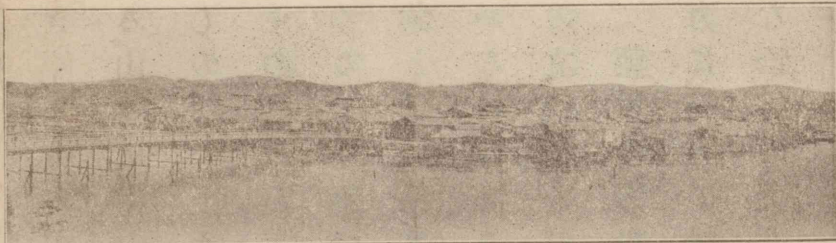


(一) 湖 道 其

の空を撼がせる。續いて私の家に近い材木町の地藏堂から、太鼓の淋しげな音が、晨の勤行を告げる。最後に行商人の物賣の聲、大根やい。蕪菁や蕪菁。「薪や薪。」
明方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開けて、河畔の底から伸びた春の若葉の軟な緑の雲越しに、朝景色を眺めやうとした。大橋川の幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方では、わななくやうに萬象を映寫して、微かに光つてゐる。この川は、矢道湖に向つて口を開け、湖は右手へ擴つて、杳乎たる

盡端

奇を街ふ



(二) 湖 道 其

連丘に包まれてゐる。對岸の日本の家屋は戸がみな閉つてゐるので、恰も箱を閉ぢたやうである。夜は明けたが、日がまだ出ない。遙かに見渡すと、薄色の霞が湖水の盡端に長くたなびいてゐる。その星雲状をした長い帯は、日本の昔の繪で見る通りであるが、實際の現象を眺めたことのない者には、畫工が奇を街つたとしか思はれないに相違ない。山といふ山をこの霞が蔽うて、峰から峰へ、はて知らぬ長さの紗のやうに、横に延びてゐる。だから湖水は實際より遙かに大

味爽

後二(オモ)

木地

蓬萊の夢

きく、味爽の空の色と入交つた、美しい幻の海となつて見える。山々は霧の中に浮ぶ島嶼で、夢のやうな一帶の丘陵は、果しのない土手道かと怪しまれる。そして霧が立つに連れて、その趣はおもむろに變つて行く。朝日の黄色な縁が見えてくると、今までのよりは更に強い、細やかな光線——分光鏡の紫と青貝色——が水面を射る。梢の上は弱い光を受ける。水のかなたにある高い建物の木地の色が、美しい靄の色で、蒸氣の立つ黄金色へとかはる。

朝日の方へ向くと、澤山橋桁の並ぶ長い木造の大橋の彼方に、一艘の船が、今しも帆を揚げんとしてゐる。こんな奇妙な恰好の美しい船を見た例がない。正にこれ蓬萊の夢であ

る。霞にぼやけた船の精靈である。しかしこの精靈は雲と同様、光線を受けて薄青い光の中で、金色に震へてゐる。

庭先の川端から、手を拍つ音が起つてくる——一回、二回、三回、四回。その手の持主は植込に遮られて見えない。しかし對岸の埠頭の石段を下りる男や女の姿が見える。めい／＼帯に小さい青手拭を挿んでゐて、顔と手を洗ひ、口を漱ぐ。これは神道の祈を捧げる前に、必ず行ふ潔齋である。それから顔を朝日に向け、四たび手を拍つて拜む。長い橋の上からも、他の拍手の音が反響の如くに出てくる。遠くにある、軽い優美な、そして新月のやうに彎曲した小舟からも出てくる。この頗る異様な恰好の舟の上から、手も足も裸の漁師が、黄金色

潔齋

東雲

をした東雲の空を拜んでゐるのである。最早拍手の數が増して、殆ど鋭い音響の連發となつた。それは人々が今みな朝日——お日様——天照大神を拜んでゐるからである。いとも貴き日の造り主よ。この心地よき日光を賜ひて、世界を麗はしくなし給ふことを謝し奉る。言葉はこの通りでないまでも、これが無數の人々の衷心である。朝日に向つてだけ手を拍つ者もあるが、大概は西の杵築の大社へ向つてもさうするのである。顔を東西南北へ向けて、群神の名を低聲で唱へる者さへ随分ある。天照大神を拜んだ後、一畑山(二)の高峰を眺めて、盲人の眼を開き給ふ薬師如來の大伽藍のある處に向ひ、こんどは佛教の儀式に隨ひ、掌を合せて、軽く擦るものもある。

衷心

(一) 杵築町に在る出雲大社。

(二) 島根縣簸川郡。松江市の西方約六里。山陰線今市驛より麓まで輕便鐵道を通す。

均整

る。しかし日本で最古のこの國では、佛教徒も亦神道信者であるから、誰も誰も古風な神道の祈の文句を唱へる。拂ひ給へ、淨め給へ、とほ神ゑみため。」

手を拍つ音が歇んで、一日の仕事が始り出し、橋の上にはからころといふ下駄の音がだん／＼高く響いてくる。大橋の上で鳴る下駄の音は、忘れられない音である。——速くて、陽氣で、音樂的で、盛な舞踏の音のやうである。實際また舞踏である。みんなが爪先で歩いて行く。朝日の射した橋の上を通る數へきれぬ人の足がちら／＼するのは、驚くべき光景である。その足は皆細くて、恰好が均整を得てゐて、希臘の古甕に描いた人物の足のやうに輕やかで、而して足を運ぶ時、

濶歩す

指を先に下す。實際下駄では外に仕様がな。それは、踵は下駄にも着かねば、地にも着かないし、足は楔形の木の臺を前へ傾けては進むのであつた。一足の下駄の上に立つだけで、慣れぬ者には困難であるのに、日本の子供は三寸もある臺の下駄を穿いて、親指と他の四本の指に挟んだ前緒だけで足を固定させて、全速力を出して駈けて行く。それでも躓きもせず、又下駄もぬげない。更に珍しいのは、大人が木履で歩く光景である。これは木の臺に高さ五寸もある齒が附いて、全體の構造は、木製の長椅子の漆塗の標本かと思はれる。しかしそれを穿いた人は、まるで足に何もつけてゐないかのやうに、樂々と濶歩する。

やがて學校へ急ぐ子供達が出てくる。彼等の駈ける時に、綺麗な飛白の着物の濶い袖が波動すると、大きい蝶が羽搏をするやうに見える。親船は白色や黄色の大きい翼を擴げると、埠頭の側で夜中眠つてゐた小蒸氣船は、煙筒から煙を吐き始める。

—まだ知らぬ日本の瞥見—

一二 祖先を崇び家名を重んず

祭政一致
宗家

社會學上から上代のわが國家を見れば、いはゆる神祇政治であつた。即ち祭政一致の状態で、治者は神祇、上も神もひとしくカミであつた。政治は即ち祭祀で、ひとしくマツリゴトであつた。又一方から見れば宗族政治で、宗家が分家を支

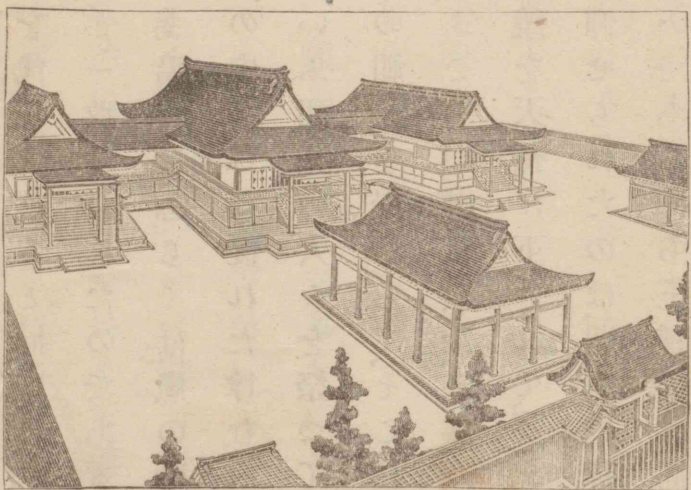
一二 祖先を崇び家名を重んず

五七

敬虔
軋轢
民主主義

配したものであつた。公は即ち大家おほきであつた。かういふ事は強ち我が國に限つた事ではない。猶太の昔にも行はれたし、其の他原始社會にはいくらかも類例のある事である。たゞそれが太古から今日まで持續し來つて、立憲政治の今日まで残つて居るといふ事が甚だ珍しいのである。社會進化論の上に一特例を成したものといつて宜しい。支那の文明を吸収し、印度の教義を採用して、神儒佛合體で國家を治めるといふ聖徳太子の方針で、今日までの變遷をなして來たに拘らず、この太古の政體に伴なふ所のカミ、オホヤケに對する尊崇心、敬虔の心即ちマゴコロを今日まで少しも失はず、それで何等の争亂もなく、軋轢もなく、更に西洋の民主主義を

畏敬
仰慕



殿靈皇 所賢 殿神 殿三中宮

畏敬し、之を仰慕する念がなければ、もとよりこの様な政體

入れて、立憲政體を爲し得たといふのが面白いところである。この昔ながらの國體で、今日の世界の間、濶歩して行けるといふのが、我が國民の強みである。

さてこの神祇政治、宗族政治の根本となつて居るものは、いふまでもなく祖先崇拜であつて、祖先の功業を尊崇して之を

一一 祖先を崇び家名を重んず

の成立つ所以がない。神話の神々は、一方に於ては自然現象を代表されると同時に、一方では祖先の大功業者たる人々と一致せられたのである。天照大神は日神、月讀命は月神、素戔鳴神は恐らくは嵐の神であらうが、之と同時に、我が民族の中で殊に優れた尊むべき方々であつたに相違ない。かういふ祖先の人々を祭つてお祭をするといふこと、即ち共同の祖先を崇奉して、そこに一致團結の政治が行はれるといふことが、神祇政治、宗族政治の本體である。天照大神が八咫鏡を天孫に下されて、之を視ること吾を見るが如くせよ。」と仰せられたのは、祖先崇拜といふことを明らかにせられたのである。即ち三種の神器をお受け傳へになつたお方が、祖

繼承

先の正統政治上の元首で、いはゆるカミで、且オホヤケであるのである。それであるから、皇位の繼承には、三種の神器が最も大事なものになつて居る。語を換へて言へば、我が國體上からいへば、どうしても祖先崇拜といふことを忘れてはならぬ。

祖先崇拜は支那人にもあるが、支那などの革命の國では、之が國家と結び付いては何の意味をもなさぬ。羅馬や希臘にもあつたが、今は跡方もない。日本では昔の神祇政治、宗族政治の政體が今日まで連續して残つて居るから、祖廟を尊み之を祭ることは、大昔から今日まで、政治とは離れられぬ關係をもつて居る。神武天皇が御即位式に、神籬を鳥見山に

神籬

宣戰講和

作つて祖宗をお祭りなされたのは、即ち之が爲である。今日でも毎年一月四日の政始には、先奏伊勢神宮之事。といふことがあるが、これは大寶令時代からの定まりである。之を以て單に昔からの習慣と見るのは間違である。今日でも國家的意味のあることである。宣戰講和の詔勅を發し給ふ時に、大廟にお告になることも、その意味からである。宮中に賢所があつて、海外へ出向く人、又は歸朝した人などが、拜謁と同時に參拜を仰せ付けられるのも、この政體の上からの意味をもつて居る。日本は神國なり。と昔から人のいふのは之が爲である。神といつても、後世に發達した各派の神道をいふのではない。全く宗教を離れての問題である。信仰の問題の

宗教の自由といふことには、何等の關係がない。苟も日本の國土に生れて、日本國の臣民たるものは、カミとオホヤケとに對するマゴコロから、祖宗の靈を尊むといふ次第に外ならぬのである。太古からの國體に伴なつたことである。

一三 マチソン夫人

下田歌子

(1) James Madison

(2) Washington. 合衆國の首

辭令に巧

(3) Jefferson. 第三代の大統領

ジェームスマチソンは結婚後數年にして、北米合衆國の内務卿となつて、華盛頓府へのぼつた。マチソン夫人は天性温和で、愛嬌があつて、辭令に巧な人であつたから、誰でも夫人に遇つて愉快を感じない者は無かつた。マチソンが時の大統領ジェファソンを助けて衆望を集めたのは、重に夫人

悦服

の力によるのであつた。
マヂソンは性質極めて剛直で、どちらかといへば、ちよつと冷淡に見えるので、他から畏敬こそされるが、悦服される徳には乏しかつた。之に反して、夫人は如何にも温和な愛嬌のある人で、そして思ひやりの深い慈恵心に富んだたちであつたから、ちやうど夫の短所を補つて、大いに其の事業を助け得たのである。縦令マヂソンの反對黨でも、一度夫人に接すると、忽ち其の反抗の鋒が折れて、遂には敵對することが出来ぬやうになつたといふことである。

縦令

マヂソンはかくの如き良妻の内助を得て、遂に前後二回大統領に選舉せられた。滿八年の在職中、或は内憂外患交、至

難局

つて、其の勞苦困難は一通りで無かつたにかゝはらず、幸に内には夫人の慰藉あり、外にも亦夫人の助勢を得て、其の難局を切抜けることを得た。

〔Virginia
州の名。
〕Montpelier.

任満ちてめでたく郷里バージニアのモン(一)トピリアーと

老嫗

いふ所に退くや、此處に廣い邸宅を構へて、高年の母と共に住つた。或時、某夫人がマヂソンの母を訪問すると、九十五歳の老嫗は眼鏡をかけて編物をして居た。婦人は之に向つて、「お退屈では御出でなされませんか。」と問ふと、老嫗はほゝ笑んで、「いゝえ、お蔭で少しも退屈致しません。まだ編物や書物が御伽をしてくれますから。それに、母が能く私を慰めて、手となり、足となつて、私の思ふ通りにしてくれますので、一向

御伽

困りません。」と言はれた。で、其の夫人は、「え、あなたの母御様とは、どなたでいらつしやいますか。」と眼を見張つていふと、老嫗は、「あれ、彼處に。」と指さす。見ると、媳のマヂソン夫人が濡れた手を白い前垂で拭ひながら、今隣室から出てくる所であつた。ホワイト・ハウスで華やかな美服を着て居られた時に引替へ、麗末なぢみな衣服、臺所の用事をして居られたのかとも見える扮装。まるで純然たる農家の主婦であるが、其の氣高き奥ゆかしさに、客の婦人は感に打れて、暫時媳と姑とを等分に見比べて居ると、兩人は顔を合せて、につこ⁽¹⁾とほゝ笑んだ。なる程老嫗が母と呼ぶのも無理は無い。夫人の態度は眞に慈母が愛兒を視ると少しも變りは無かつた。

White
Hon.
大統領の官
會

扮装

等分に見比
べる

で、其の婦人は歸つてから人に語つて、「マヂソン夫人は交際に巧な、快活な圓滿な人として世に響いて居るが、私は却つて、一農家の主婦として能く其の家政を理め、能く其の姑に事へる天晴な良妻として見た方が遙かに貴いと思ふ。誠に花の美なるも實の佳なるには及ばぬ。」と感歎したといふ。

—良妻と賢母—

一四 勤 儉

細川潤次郎

要件
勤と儉とは二箇の意義なれども、大方は相類似せるものにて、共に修身の要件たり。勤儉は事實に現るゝものなれども、其の本は我が心に在りて、心中の勤儉を身の行爲に見す

管にみならずの

るものなり。勤儉は管に修身の條件たるのみならず、抑亦治家の要件なり。古人、勤儉を以て家を治むる本とせり。此の心掛なくば、家を治むること能はざるべし。何事にても、勤勉ならざる時は、其の執る所の業を全くすること能はずして、之に對する報酬を得ること能はず、家道の成立すべきやうも無かるべし。又縱令勤勉にして財を得とも、之を用ふるに節儉ならざる時は、之を蓄積すること能はずして、勤勉の功全からず。故に勤と儉との二つは、相須ちて用をなすものと知るべし。

勤勉は時をも事をも擇ばずして、人の常に心掛くべき事なれども、又其の効果を慮らざるべからず。凡そ事を爲すに

相須つ

慎思熟慮

先だち、慎思熟慮して、其の必要なると不必要なるを分別し、不必要なる事には心を用ひず、有用にして成功の確實なるべきものを選びて之に従事する時は、勤勉の効果を得べけれども、若し徒に身心の活動にのみ一任して、輕舉妄動するが如き事あらば、其の事は勤勉に似たりとせんも、所謂徒勞にして益なきのみならず、或は失敗に陥りて、悔ゆとも及ばざることあるべし。且又精神の作用にも、身體の勞働にも、自然の制限あるを以て、精神も身體も共に過勞する時は、健康に害あること固より論を待たず。此の故に、勤勉は必要なれども、休息も必要なり、睡眠も必要なり、時々出遊して快樂を覺ゆるも亦必要なり。そは、休息も、睡眠も、出遊も、皆勤勉を

輕舉妄動
徒勞

常度

保續するに必要なればなり。將又勤勉時間に於ける勤勉も、常度を守るべくして、過度ならぬがよし。すべて事を爲すは、輟めず怠らざるやうにせば、事足りぬべし。時に由りては、非常の勤勉を要する事もあるべけれど、非常の勤勉は永く繼續すべきものに非ず。譬へば、人の道を行くが如し。倍道兼行する時は必ず大いに疲勞して、長き時間の休息を要するものなればなり。

倍道兼行

儉とは節約して浪費せざることなれば、別に深遠なる意義は無きやうなれども、儉約の程度は、人々の身分に隨ひて同じからず。每人毎事、考慮を要することなるべし。其の身分に由り、儉約の程度を取違へたる時は、其の儉約は儉約に非

斟酌
(一)生財有二大
道生之者衆
食之者寡爲
之者疾用之
者舒則財恆
足矣。(大學)

ずして、儉約以外の名を下すべきものとなるべし。貧賤なる人にして、富貴なる人の儉約を學ぶ時は、其の儉約は猶奢侈たることを免れず。富貴の人にして、貧賤なる人の儉約を學ぶ時は、其の儉約は全く吝嗇となるべし。此等の程度は、分別すること容易ならず。時としては分別すべからざることもあるべければ、實際に就きて斟酌すべし。要するに、之を生ずること多く、之を食むこと寡く、之を爲すこと疾く、之を用ふること舒なり。といへる格言の如く、すべて支出の収入に超過せざるやう心掛くる時は、儉約を實行するにつきて、大いなる過なかるべし。

己に奉ず

己に奉ずる儉約は、家道の貧富に準ずること勿論なり。但

尋常の茶飯
も膏粱に異
ならず

疏通

し、貧者の儉約を實行するに於て、粗衣粗食して陋屋に居住するは、固より已むを得ざることなれども、費用の許す限りは、衛生の道に負かざるやう心掛くべし。衣は粗なりとも、温暖にして垢汚なき時は、木綿も絹帛に異なること無かるべし。食は粗なりとも、烹飪宜しきを得て味悪しからぬ時は、尋常の茶飯も膏粱に異なる所無かるべし。家屋は掃除して良く風氣を疏通せしむる時は、陋屋も廣莊大廈に異なること無かるべし。衣食住の費用を支拂ふには、少しく其の額を増すことありとも、苟も其の事衛生の道に合ひて健康に益ある時は、其の健康なるに由りて得たる勤勉の功に由り、其の費用を償ふことを得べし。若し然らずして、儉約の濫用に由

(二)倉廩實則知
禮節、衣食足
則知榮辱。
(管子)
裨益

り、健康を害するが如きことあらば、何事にも勤勉すること能はずして、得べき財をも得ざるのみか、或は療養の費用を支出すべきことさへありて、甚だしき不利を來すべし。故に儉約の濫用は、儉約に反對するものなり。

上に述べたる勤儉を適當に實行する時は、漸々家道に餘裕を生じ、倉廩實つべく、衣食足るべく、禮節を知ることを得べく、榮辱を知ることを得べくして、其の修身に裨益あること、固より論を待たず。

— 修身要領 —

自修文

一五 醫者の來るまで

負傷や病氣は手當が後れると取返しのかかぬことがあり、深

應急手當
急場の間に合
はせる手當

夜又は不便の地で、醫師の間に合はぬこともあるから、一通りの
應急手當を心得て置く必要がある。
切創は切口を押へ、創の周圍を硼酸水か清水で洗ひ、ガーゼを
當て、繃帶を施すがよい。それでも出血が止まなければ、創口の
少し上の方を固く縛る。軽い創には取敢へず絆創膏を貼つて置
く。

火傷には直ちに油を塗る。これは空氣に曝すのを避ける爲で
ある。皮膚が赤く腫れて多少の痛みを覺える程ならば、冷水で冷
す。又水泡を生じた時は、綺麗にした針で其の縁の方を刺して水
氣を取り、硼酸軟膏を塗るがよい。忘れても其の皮をむいてはな
らぬ。ランプの火が衣服に燃廣がつた場合には、すぐ其の人をね
かし、着物蒲團、毛布の類を手早く掛けて押へれば、火は忽ち消え
る。あわて、水を掛けるのは極めてあぶない。
水に溺れた者の手當は、まづ衣服を脱がせ、腹を己が膝の上に

水泡
水ぶくれ。
忘れても
うつつかりし

うつぶし
したむき。は
らばひ。
蘇生
いきかへるこ
と。

ピンセット
毛板のやうな
形した細くて
物をはさむ器
具。
合嗽
うかつひ。

虞
しんばい。

當て、うつぶしに臥させ、其の胸部を低くして、少し頭を反らせ
て、水を吐かせるのである。それでも蘇生しなければ、人工呼吸法
を施す。人工呼吸法は、仰向に寝かして、子供なら胸の兩脇を押へ
ては離し、押へては離し、大人ならば其の兩手を靜かに上下して、
呼吸を促すのである。

咽喉に骨のさゝつたのは、飯の塊か卵の黄味を丸呑にする。そ
れで取れなければ、ピンセットで取る。取つた後は食鹽水で合嗽
するがよい。

咽喉に物のつまつた時は、其の背を一二度強く打ち、或は指を
深く入れて吐氣を催させる。若し貨幣、硝子球等を嚥下して吐出
させることの出来ない時は、飯、いも、とろろ、等軟いものを澤山食
はせ、便通と共に排出させる外は無い。

耳の中に豆粒や蟲などのはいつたのを簪などでむやみに搔
くと、却つて奥の方へ押込む虞がある。長い木綿針の先を焼いて、

スポイト
ポンプの用を
する小さい器
具。
微温湯
ぬるまゆ。
布片
ぬのきれ。
点滴
ののぎれ。
たらすこと。

人事不省
俗に正氣を失
ふといふ何
事も分らな
くなること。
卒倒
人事不省にな
つて俄に倒れ
ること。

其の先を曲げて引掛ければ取出すことが出来る。細かい物のはいった時は、スポイトを用ひて微温湯で耳の中を洗ひ、或はオリーブ油四五滴をさせば、おのづから流れ出る。目にごみのはいつた時は、成るべく手でこすらぬやうにし、清水を脱脂綿又は清潔な布片に浸して眼中に点滴するか、又は眼瞼をかへして除き去るがよい。

蟲に整された時には、アンモニヤ水を塗る。蝮に噛まれた場合には、取敢へず創口の周圍を成るべく廣くつまんで、出来るだけ血をしぼり出し、上部を手拭などで固く縛り、早く醫師の診察を請ふがよい。

高い處から落ちて人事不省となつたのは、脳震蕩といつて、極めて危険なものである。此の場合には静かに臥させて、身體の安静を保つのが大切である。起したり坐らせたりしてはならぬ。足部が冷えれば湯たんぼを入れ、發熱があれば頭を冷す。卒倒する

中毒
食物にあつた
れること。

痙攣
俗にひきつけ
とひきつけ
状態は白眼を
震はせる。
下腿
脛から下の部
分。
覺醒
氣がつかくこ
と。
窒息
息がつかまるこ
と。

のは腦貧血が多いが、其の時には頭を低くして静かに臥させて置く。

中毒と見たら、其の食物を吐かせる工夫をしなければならぬ。それは指を口の中に深く入れて咽喉をなでまはして吐かせる。若し吐かなければ微温湯、牛乳、茶等を多量に飲ませて、其の毒を薄めるやうにする。中にも牛乳は最も効が多い。

子供が痙攣を起した時には、何病にかゝはらず、まづ静かに床に就かせ、熱があれば頭を冷し、便通が無ければ灌腸を施す。痙攣が長く止まなければ、茶子と饅頭粉を等分に交ぜたものを、湯か水でこねて、半紙に厚く二三寸四方にのばし、紙の間に挿んで、下腿の内側に五六分間貼る。但し其の部分が赤くなつたら取去つて宜しい。又一時の痙攣ならば冷水を其の顔に吹掛ければ覺醒する。強ひて服薬をさせると、藥液が氣管に流れ込んで窒息させることがある。

如何なる場合にも決してあわてること無く、直ちに必要な處じ置ちをして醫師の來診を待つのが、應急手當の精神である。

— 國定高等小學讀本 —

一六 國民としての女子

兄弟七人男揃にて一人の女の子なき家もあり、生るゝ子も生るゝ子もみな女にて一人の男の子なき家もあれど、一都市、一國の平均より見れば、男女の數の大抵相等しきこと、人口統計の示す所なり。されば、日本國民七千萬といへば、其の約半數三千五百萬の女子たるは言ふまでもなし。

萎靡
向上の志

國の強盛繁榮の進運に向ふも、萎靡不振の状態に陥るも、其の國を構成する國民の志氣如何にあり。國民にして向上

の志なく、遊惰にして産業に勉めざれば、其の國遂に亡國たるを免れず。之に反して、國民皆勤勉にして新銳の氣力に満たば、其の國必ず興る。これ既往四千年、世界歴史の證明する所なり。

男子と女子とは務むる所各異なり。男子は主として外に在りて職業に勉め、女子はむねと家に在りて家政を治む。然れども、其の國家に對する奉公の精神は同じからざるべからず。如何なる業務に服する人も、我が國民七千萬中の一員たることを忘れず、女子が内に居て家を治め子女を教育するに當りても、これ即ち國家奉公の重大任務を盡しつゝあるなりといふ一念を肝要とす。一切の國家的事業は男子の

關與

弓弰の調
手末の調

手に在り、女子は毫も之に關與することなしと思はゞ、我が國は已に三千五百萬の國民を失へるに同じ。

古へ崇神天皇の御代、男子には弓弰ゆまの調、女子には手末たまの調を奉らしめ給へり。これ男女均しく國家に盡さしむる意なり。手末の調は必ずしも女子が手藝の製作品をのみいふにあらず。若しくは精神上より、若しくは體力上より、女子として國家に盡すべき道は多々あり、其の任務の重大なる、男子に等しきことを自覺せよ。

一七 原總右衛門の母

下田歌子

播州赤穂の城主淺野内匠頭長矩、元祿十四年の春の三月

勅使下向
及傷
采地

勅使下向の際、殿中に於て吉良上野介義央を刃傷に及びける罪科によりて自盡を命ぜられ、采地を沒收せられぬ。この故に其の老臣大石内藏助良雄は、原總右衛門元辰等と相謀りて、主君の爲に復讐の企をなしけり。

爾後大石は京都に住し、原は猶止りて赤穂の城下に住し、時々密使を交換し、書狀を以て互の意思を通じたりけるが、一日總右衛門は老母の傍に侍して、さまざまの物語の序に申しけるは、此の度餘儀無き用事出で來て、京都へ登らんと存候が、事によりては江戸まで罷り越すやも計り難く、さ様の事にも相成候はゞ、一月餘は日子を費し申すべし。留守は定めて御徒然にて、御不自由の程もさこそと推量り參らす

日子

打ちまもる

たゆたふ

譜第恩顧の

主〔范蠡曰く爲人臣者君憂臣勞君辱臣死〕〔國語〕

修羅の妄執

れども、いかで暫時身の暇を賜ひ候へ。といふ。母はつくづく、と我が子の顔を打ちまもり居たりしが、いや、汝一度此處を去りて江戸表へ罷り越すならば、よも再びは歸り來らじ。これ今生ツラセの別なるべし。といはるゝに、總右衛門打驚きて、如何に答へんとたゆたふ程に、母は重ねて、汝驚くこと勿れ。そも武士の家に生れて、譜第恩顧の主の爲に身を致すは、誠に至當の事ならずや。古語に曰く、君辱めらるゝ時は臣死す。』と、忠孝両全は爲し難き事なり。必ず母に心を残さずして、一日も早く亡君の爲に修羅の妄執を晴し奉り、忠義の道に潔く相果てんこそ母のこよ無き望なれ。何のたゆたふ事かは。』と勵まされたる母の詞に、總右衛門は覺えず感涙に咽び、誠

漏泄
神文誓詞

山城國宇治郡、京都と大津との間。

呻吟す

病怠る

思ふものから

は早くより大石殿と心を合せて、内々復讐の準備を整へ候へども、事の漏泄を恐れて、父母妻子にも語るまじとの神文誓詞を仕候故に、今日まで母上にも御明し申さざりしを、何卒御免し下されかし。と申しければ、母大いに悦びて、急ぎ旅立の用意ども取整へてぞ出し立てける。

さて原は山科〔一〕なる大石が家に往きて見るに、近き頃より良雄は病床に在りて呻吟したりければ、いたく驚き憂へて、心を盡して看護しけるに、病は思ひしよりも頓に怠り方に成りぬ。今は後安しと思ふものから、猶關東へ下らんことはおぼつかなく、暫時かくて保養あるべきことゝ人々も言合ひけり。總右衛門もげに然るべしと同意して、さらば我も今

調じて

一度立歸りて母の安否を問ひて來んとて、更に赤穗へ取つて返し、しかく、と告げけるに、母も初は何事か打案じ居たるが、漸くに氣色直りて、さらば久々にて諸共に一獻酌まんと、手づから調じて子に進め、我も盃取りて、宵過ぐる頃までいと心地よげに打語らひつ、明日を契りて各臥戸に入りぬ。かくて夜明け、日は昇れども、母の起出で來らざるに、總右衛門いぶかしみて、下婢をしてやをら其の寢所を窺はしめけり。下婢は寢所に入るや否や、あつ。と叫びて轉び出でたり。總右衛門驚きて走り入りて見れば、こはそも如何に、母は懷刀に喉をさし貫きて自盡し、うつ伏しに臥し居たり。餘りの事に涙も出でず、騒ぐ心を強ひて押鎮めて、物やあるとあた

いぶかしむ
やをら

りを見れば、果してそが枕邊に一封の書あり。披きて讀めば、かくぞ書きたる。

一筆申し殘し參らせ候。常々孝心深き事は詞にも述盡し難し。殊更母の事を思ひて、故郷へ立歸るなどの心づかひ、我が身にとりては如何ばかりか悦び入り候へども、まづ討入といはん時、ふと母の身の上を思ひ出し給ふならば、進む勇氣も忽ち挫けて、敵に内兜を見られ給はんか。これ全く母の存命故と存候まゝ、惜しからぬ老の命、今宵先立ち申候。是も子を愛する道にもあらんと、女心の一筋に思ひきはめたるに候。此の上は跡に心殘なく、吉良殿は亡君の仇、母の敵と思ひつめ、討入り給ふものならば、鏡き手柄

内兜を見ら
る

安堵

を致され候はんと安堵致參らせ候。何事も最期を急ぎ、勿
勿申殘し候。

母

總右衛門殿

總右衛門は此の遺書を見て、心弱く立歸りしことを後悔
すれども、今は何のかひあるべきにあらねばと、益志を勵ま
して、直ちに京に取つて返しぬ。かくて吉良家討入の夜は、比
類無き手柄をあらはしけりとぞ。誠に、此の母にして此の子
あり。とは、此等の事をやいふべき。

一八 舊藩の明君

其の一

堵に安んず

徳川時代三百藩は、各其の土地人民を領して、一々別國の
觀を呈してゐたが、いづれも學者を聘し、賢者を擧げ、學問を
勸め、産業を起し、出來るだけの善政を布いて、封内の人民を
して、其の堵に安んぜしむる様にと苦心した。鎖國の二百六
十餘年間は、かくして太平無事の世であつた。上下の階級が
やかましく、職業世襲の制度で、技能材幹あるものの新進の
道は十分に開けて居らなかつたが、四民皆其の分に安んじ、
其の業を樂しんで、何等の不平もなく、安穩な生活を營んで
居つた。凡そ世界の歴史で、これ程安樂な時世は無かつたら
うとさへ、或外國の史家は言つた。

分に安んず

大學、中庸論語、孟子の四書は忠孝の道を訓へる儒教の經

實踐躬行
齊家
治國平天下

典で、武士は之を學んで、實踐躬行の標準とした。いづれも齊家を本として、治國平天下の大道を教へたので、個人の修徳から社會の改善に進まうとするのである。孟子の書には殊に人君たる道、人民を治める道を説いた文章が多い。君主は天に代つて人を治めるので、君徳の無い者は君主たる資格が無いといふ支那思想が、其の根本になつて居る。各藩の藩主は皆それを自分の事として、徳を修め、治に勵むことに工夫した。各藩の儒者は皆此の旨を以て主君に進講したのである。間、暗君で民を虐げたものも無いではないが、概しては各藩に賢明な主君があつて、民衆の福利を圖つたのである。各藩の藩祖には明君と稱へられた人が多く、各其の遺訓を

進講

子孫に傳へて居り、歴代の主君は亦皆藩祖の遺訓を守つて、ひたすら其の家門を辱めまいと考へて居つた。今各藩主の顯著な治績に就いて、其の二三を記さう。

封す

徳川義直は家康の第九子で、尾張名古屋の藩祖である。慶長十二年始めて尾張に封ぜられ、十四年名古屋に城を築いて之に居り、慶安三年五十一歳で歿した人である。此の頃は戦亂が纔かに息んだばかり、人々は武藝を修めるばかりで、諸藩ともに學政に心を傾ける人は少かつた。義直は此の時に於て、儒教を尊奉し、聖堂を建て、釋奠の祭を行ひ、經籍も多く集めて、盛に藩中の學問を奨勵した。文教に於て、實に諸藩に率先したのであつた。尾張の敬公といふのは此の人で、

聖堂
釋奠

鍾愛

明治三十三年正二位の贈位があつた。

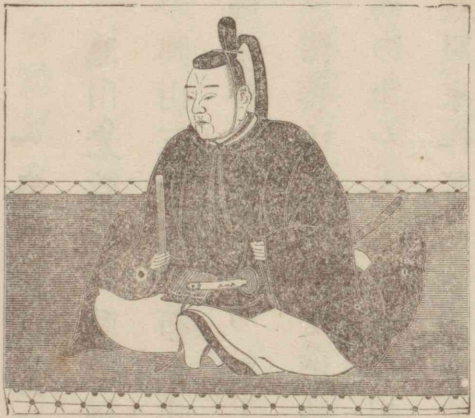
紀州和歌山の藩祖頼宣は義直の次の弟で、家康の第十子である。大阪の冬の陣に、十三歳の初陣をした人で、智畧もすぐれて居つたから、殊に家康に鍾愛せられた。夏の陣に軍功の無いのを悲しんで、十四歳は再び來らず。と言つたのは、名高い話である。武勇ばかりではなく、文事をも好んで、詩歌にも堪能で、學者を登庸して、よく其の諫を容れた。或時藩吏の某々等が、諸處の土地を開拓して、新田を作ること願つた。頼宣は之を聞いて、我が領分の中には、數多の名所舊跡があつて、累代の和歌集にも載つてゐる。汝等唯實利をのみ圖つて、天下後世の物笑になるな。と言つたので、其の事はやめに

登庸す

なつた。

頼宣の同母弟頼房が水戸の藩祖で、其の第三子が有名な

偉勳



徳川光圀 圖

光圀である。忠孝の志も厚く、仁慈の徳にも富んで居つて、種々な善政を施したが、就中後代までも其の偉勳を留めたのは、學者を集めて大日本史の編纂に着手した事である。それが爲に藩祿の半分を割いてあてたのである。國體論、尊

王論の根ざしはこゝに生じたので、光圀の修史事業が、遠く明治維新の原因をなして居るのである。明治二年從一位の

陸叙

贈位があつたが、同廿三年には更に正一位に陞叙せられた。

一九 舊藩の明君 其の二

池田光政は輝政の孫で、初め因幡伯耆を領したが、後備前の岡山三十二萬石の主となつた。少年の頃の夜食は茶漬に焼味噌のみであつたといへば、其の儉素の程も知られる。後熊澤蕃山を用ひて庶政を改善した。其の語に、「人に下り、目の前の事をも人に尋ね相談して善を取る所、儉約の第一なり。衣服、家作等は儉約の枝葉たるべきものなり。」と言つたのを見れば、如何に其の人言を容れるのに工夫したか分る。或時封内の農甚助といふ者が、親孝行の廉で褒賞を得た。それ

儉素

(一)字は了介。中江藤樹の門人。京都の人。元禄四年(一七三三)歿。年七十三。

人言を容る

を羨んで、甚助の隣の者が其の眞似をしたところ、光政は同じくこれにも褒賞を與へた。或役人、彼は似せもので御座います。」と言ふと、光政「似せでもよい。孝行を勵むがよい。」と言つたさうである。

加賀百萬石の前田家の第五代の主君を綱紀つなつとといつた。三歳で父の後を繼いで、八十二歳で死ぬまで、七十九年間在職したのも珍しい事である。藩政を改革し、學問を獎勵した事蹟は一々擧げるに追が無い。其の領土加賀、越中、能登の三箇國の獄屋が全く空虚であつたといふのでも、其の政治の行届いた有様が知られよう。徳川光圀が「嗚呼忠臣楠子之墓」といふ碑を湊川に建てたのも、此の綱紀の徳憑とくぞうに基づいたの

徳憑

だといふ。

上杉鷹山、名は治憲、米澤の城主である。學問を好み、學者を禮遇し、時々國中を巡視して、孝子を表彰することを怠らな



上杉鷹山

かつた。農業を奨める爲、自ら泥田の中に立つて鋤を執り、家老以下をして之に倣はしめた事もある。儉約を第一とし、種々産業を興すことを令したので、藩中の風儀も全く改つた。米澤織など今日の産物となつて居るのも、全く鷹山が勤勉の遺徳である。

熊本藩の賢君は細川重賢シノガワである。よく役人を拔擢して、適

風儀

適材を適處
に用ふ

大節に臨み
て死を致す

皆無

參勤交代

材を適所に用ひたので、學問も興り、士風も奮ひ、藩政も面目を一新した。天明年間の大饑饉の時の事であつた、勘定方の役人が重賢に向つて、今年は収入の減少が夥しいから、諸士の祿高を減らして入用に立てたらば、と建議した。重賢之を聞いて、大節に臨みて死を致すのは武士ではないか。武士の俸祿を減らしては、事に臨んで義氣の緩むこともあらう。減らすことは相成らぬ、と承知しなかつた。又米價が騰貴して、隣國では餓死者が頻に出來た程であつたが、重賢は國中に令して、米價の小賣直段を定めさせ、若し市中の米が皆無にならば、藏の米を出して補ふといふ事に定めたので、領内の米價は直ちに下落した。されば其の後參勤交代で東上する

(一)大分郡の町。

途中、豊後鶴崎^(一)まで三十里が間は、國中の人民が皆路ばたに
跪いて感泣したといふ。

かういふ様な明君の事蹟は數限りも無く多い。徳川時代の
昌平無事も、全く偶然の事柄では無かつたのである。

二〇 筑紫の旅

幸田露伴

六月十五日朝九時頃馬關に着く。市街は一般に道幅狭し。
物の價貴く、人の勢鋭く、米商會所賑し。物賣る女の盤臺を戴
けるも珍しく、祭文めきたるものを歌ひながら弾じて錢を
乞ふ乞食なども眼新し。

十六日朝まだき、船にて博多^(二)に渡る。宮崎の八幡宮^(三)に詣で

祭文
(一)福岡市内。
(二)宮崎宮。官幣
大社。應神天
皇神功皇后
玉依比賣を祀
る。

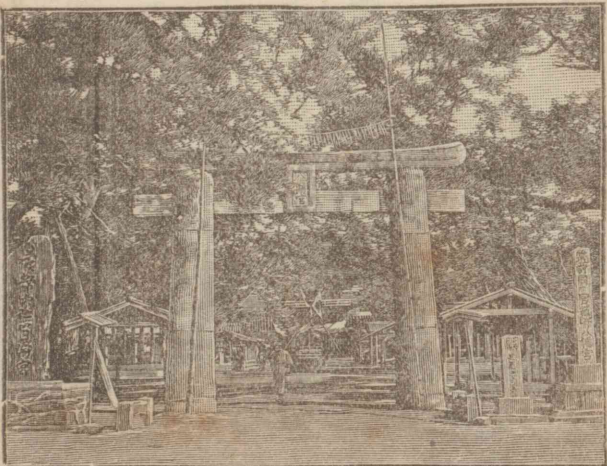
盤臺

遠白し

煙波渺茫

宸筆

(一)福岡市の西南
なる鐵道驛。
(二)筑前國筑紫
郡。



宮崎宮

んとて、濱傳ひに十餘町ばかり、松蔭翠に沙遠白き間を辿り
て行く。八幡宮は海に向ひて鎮
座あり。煙波渺茫^(一)として、遙かに
朝鮮、支那と連る。金字眩く「敵國
降伏」と讀まるゝ醍醐帝の宸筆
を摹寫し奉れる額のかゝれる、
いと畏し。三拜して博多の町に
歸る。

車に乗りて二日市^(一)に着す。濛々と煙る雨を冒して直ちに太^(二)

行李

星霜

霏々
さびたる廻廊
苔むせる捨石

宰府に到るに、府中の町名に梅大路などいへるがありて、昔しのぼる。晝餉たふべく豫め定めたる家に行き預け置きて、菅公廟に詣づ。廟はもとより丹碧金銀を施さざる素樸のものなるが上に、星霜を経たれば、いと神さびて、何となく尊し。太鼓橋の高く架せる、神池の静かに水を湛へたるも、皆景致あるに、ことさら雨の霏々と降れば、さびたる廻廊、古き梅の樹、苔むせる捨石などの濡色一入面白く、廟後に數ある小祠の、我等が歩むにつれて、隠見し、小さき瀑布の、常にはましてと覺しく、勢よく落つるも亦興あり。池邊に蔭暗きまで生ひ茂りたる大樹あるを、友は指さして、此の樹必ず蒙古事件を傍觀せしなるべし。と評しけり。

晝餉を終へし後、模糊たる天拜山を雨中に望みながら、宰

府を出づ。宰府、二日市の間には路傍に櫨の木多く、大抵葦繩をもて、枝を其の幹に結びつけ、實の熟するにつれて、重さの増すとも、枝の折るゝこと無きやうに備へたり。此の夜は久留米に宿す。

後に思へば、筑前に櫨樹多くして、人民其の益を受くるは、筑紫郡山田村の人高橋善藏といふ者の遺澤なりき。善藏は貞享元年(一)に生れ、寶曆九年(二)に歿せしが、享保年間(三)



大宰府神社樓門

模糊
(一)筑前國筑紫郡山上に荒穂神を祀る

(二)筑後國久留米市九州鐵道の大驛

遺澤

(三)靈元天皇の御代。(二三四)
(四)桃園天皇の御代。(二四一九)
(五)中御門天皇の御代。(二三七六—二三九五)

に櫛の實の利益あるを聞き、自ら薩摩、肥後に赴きて栽植培養の法を學び、歸村の後試み作りしに、果して利益多かりければ、斷然畑作を改めて、櫛樹を栽培しけり。定まりたる利ある畑作を改めて、眼慣れぬ櫛樹を植ゑたるを見て、村民は初こそ嘲り笑ひたれ、後には其の利多きを知りて、倣ひ植うるに至りしより、遂に今日あるを致したりとぞ。善藏死に臨める時、我が亡き後のしるしには、石もて碑を設け、木をもて卒塔婆を建つるに及ばず。たゞ櫛の樹を塚上に植置きくれば、我が願足れり。我が一生の精神は櫛の樹に籠れるなれば、と遺言しける由、心を存すること篤くして、いと殊勝なるものといふべし。

卒塔婆

殊勝

(一) いづれも肥後國。

了ふるすなはち
 (三) 肥後大河の一里。長さ二十
 (四) 肥後國宇土郡熊本。市の南四里。
 (五) 同國下益城郡。宇土町の南一里半。
 (六) 薩摩國出水郡の海濱にある小驛。

十八日、高瀬^(一)、田原坂^(二)など十年役の古戰場を過ぎて、熊本に着きたれど、暑さにあたりて苦しき上、足さへ痛めたれば、友の購ひ歸りたる名物朝鮮飴を味はひしのみにて、其のまゝ眠を貪りぬ。

十九日の朝起出でて見れば、足の痛みは異ならねど、頭の重きはやゝ薄らぎたり。いざとて朝餉を了ふるすなはち、車を僦ひて、此の地を立出で、緑川^(三)を越えて宇土^(四)に至り、宇土より松橋^(五)といふ船つきの淋しき町に到り着きぬ。此のあたり、人力車の轆みな象の牙のやうに仰ぎて反れるを、友と怪しみ噂しけるに、今また薩摩の米^(六)の津まで海路二十五里を越ゆべき筈にて僦ひたる舟の來れるを見れば、こはいかに、長

森々

父母ある者のなすべき事か

さ四間にも足らざるべき小舸なり。處の習にて、車の形、舟の式の異なるはいふにも足らねど、烟波森々として、島山遠く蜿蜒たる外には、眼を遮るもの無き此の灘を、かゝる舟にて渡らんこと、父母ある者のなすべき事かと、しばし怪しみ迷ひけるが、旅人は皆これにて渡る習なりといふに、聊か心強くなりて、遂に乗込みたり。

(一)八代海中にある小島。
(二)又の名瀬戸上島。八代藩の西。
風蓬々

初は風乏しくして、舟の行くこと極めて遅かりしが、暫くして強風起りければ、樋島、天草上島の間、に避けたり。石灰焼けるが見ゆる迫門を出果つるころほひより、よき程に風蓬と吹出し、十分に張りたる白帆の破れもするかと思ゆるまで膨み孕みて、少し傾きたる船の舳先の、水に突入るばかり

曠原

(一)米の津より北三里半。

り烈しく浪を截つて進む快き。駿馬に鞭うちて曠原を馳するとは、また異にして趣あり。

舷を拍つ

水俣の沖を過ぐる頃、太陽西の方に沈めば、雲は赤金の色をなして輝き、浪は鎔けたる鐵の焰を揚げて流るゝが如し。

蒼然

面白の眺かな。歌も及ばじ、書も及ばじと、友と共に舷を拍つて賞歎する間もなく、日輪全く没して、暮煙蒼然と海上を罩め、舟の中の隅々次第に薄昏くなり、浪の頭の雪を捲くやうなるばかりぞ、ほの白く見えぬ。さすがに漁火も見えず、行きかふ舟に逢ふ事もなき海上の孤舟にて、うば玉の暗き夜

うば玉

詩興

に入りたる、何となく心細く、舟子の吸へる煙草の火の唯一點、此の暗の中に赤く見ゆるなど、詩興としては自らをかし

愴然

いぶせき家

と思はざるにあらねど、實は少しく愴然として、物言ふことも少くなりゆきたり。夜更けてやうく米の津に着きぬ。旅宿を擇ぶ暇もなく、舟子の導くがまゝに、いといぶせき家に宿る。

—まき筆日記—

自修文

二一 漆器

日本の國號のジャパンといふ語は、英語にては漆器の意味にも轉用せらる。外人が日本を漆器の本場と見做せることを察知すべし。漆器は古くより支那にも産し、又近年獨逸國にて模造品を産すれども、共に見るに足らず、日本漆器の輸出は年額百萬圓以上に及ぶ。

漆器の産額は和歌山、石川二縣最も多く、各二百萬圓以上に達

(一)Japan. 模造品
まねて造つたもの。まがへ

- (一)弘前市及近東津輕郡造道村に産する。
- (二)能代港町に産する。春慶は創製者の名。
- (三)多く若松市に産する。
- (四)輪島で製する。
- (五)江沼郡山中に産する。

(六)小濱に産する。

(七)新潟市に産する。

(八)黒江町に産する。

(九)玉椿(象谷といふ者の創製)。

平塗 一色でのべに塗つたもの。

顔料 色のぐ

朱塗 辰砂といふもの。

黒塗 黒を混ぜた墨色の漆で塗つたもの。

青貝塗 あらむ貝などの介をちかみ漆と共塗つたもの。

梨子地 金銀の粉をまき其上に漆を塗つてとき出したもの。

し、京都府、福島縣、静岡縣、新潟縣等之に次ぐ、静岡縣の漆器は専ら外國に輸出せられ、我が國輸出漆器の大部分を占む。弘前の津輕塗、秋田の能代春慶塗、會津の會津塗、能登の輪島塗、加賀の山中塗、若狹の若狹塗、新潟の堆朱塗、紀伊の黒江塗、飛驒の飛驒春慶塗、高松の象谷塗、静岡の木地蠟塗など著れ、京都、石川の蒔繪また貴ばる。

塗方より區別すれば、平塗といふに二様あり。一は木地に顔料を施し、其の上に直ちに漆を塗りて木地の見ゆる様に仕上げたるものなり。飛驒及び能代の春慶塗の如き是なり。二は漆に顔料若しくは金銀、貝殻等の粉末を混じて塗上げたものなり。普通の朱塗、黒塗、青貝塗、梨子地塗等之に屬し、各地の製品中に多し。地紋塗は彩漆を用ひて種々なる模様を塗出したるもの。堆朱は朱漆を厚く塗り、山水花鳥等を彫刻したるもの。いづれも美術製品に屬す。就中蒔繪の漆器を漆器工藝の王とす。

二二 夏の草花

三 宅龍子

さはいへど

蓬葎

愛すべき節

夏は風も親しむべし。さはいへど、なほ草花の咲誇れる庭園こそ嬉しけれ。葎蓬といふだに、なほ我が身の程の花は咲くなり。天の愛で培へる花に、いづれか優り劣りあるべき。親しみて見れば、花といふ花には、それ〴〵愛すべき節の見出さるゝも面白し。

赤花隠元といふを、彼岸の頃三つ四つ土にふせて置きつるに、六月の中頃よりのび〴〵と成長し、蔓には赤き花をつけたり。いと愛らしき花なれば、毎年之を植うるに、今は庭に無くてならぬものの様になりたり。

蔓ある草は優にやさしう覺ゆるものぞかし。自然生とい

優にやさし

ふりおもしろし

ふ芋を人の贈り來りしことありき。あまり細きがありしかば、垣の根に植ゑ置きしに、零餘子あまた實のりて落ちつるが、彼所此所と今年はあまた生ひ出でぬ。竹を添へてやれば、這ひまつはりて茂りあひぬ。白き花の咲くべき頃もをかしかるべし。實のほろ〴〵と秋風にこぼれん程、いかにあはれ深からんと樂しむ。かくふと蔓草を愛で思ふ心つきてより、瓢箪も植ゑにき。絲瓜も植ゑにき。のうぜんはれんのふりおもしろき、木通の延びんまゝに延びさせたる、皆とり〴〵にかしかるべしとて、松、杉などに添へて植ゑにき。

朝顔の花はさのみ愛で思はざりしが、今年は農事試験場にいひ遣りて取寄せし芽生の、いとも見事に、獅子など名を

魁けて
照りはた

もつくべからん花の、一つ魁けて咲きたるもをかし。南瓜の
轉がれる畠に、晝顔の花の眞晝の照りはたよく日影を物と
もせず咲出でたるを見ても、

よられたる草葉の中に咲きにけり

つゆもたのまぬ晝顔のはな

と伊東祐命大人の詠まれし歌を思ひ出でぬ。

スウィートピーのほのかをれるもなつかし。去年の秋の

彼岸に種を蒔きしが、大きく丈のびたれば、竹など添へてや

るに、蔓のこれに縋りて、風にゆらぐもうるはし。今年の春蒔

は丈も低し、葉色も悪し。萬綠叢中紅一點とうたひし石榴も、

夏の庭にはおもしろく、花も實もこは仙人めきたり。

(一)國學者。前田夏陸等に學ぶ。明治二十二年歿。
ほのかをる

綻る
(二)萬綠叢中紅一點。動人春色不須多(書言故事)

仙人めく

品定

(一)歌人。香川景樹の門人。文政四年(二四一八)歿。年四十三。

仙人^{サキ}掌^{ウデ}こそおもしろきものなれ。冬は眠れる如くして、夏
になればいやが上にも芽を出し、桃色、赤、黄などの花をつく。
花は燃ゆるが如く匂へるに、それを我が上とも知らぬやうに、
山の如くひややかに立てる有様のをかしさよ。狭き庭を心
ひろくと見渡して、花の品定しつゝ、縁に腰打掛けたる程、
昨夜の雨に萩の泥にまみれ伏したるを見出でて、あなあは
れと急ぎかき起せば、はや花の咲きたる枝もありけり。木下^(一)
幸文が

つゆにふす萩の下枝かき起し

見れば花こそ咲きそめにけれ

と歌ひしを思ひ出づ。かく其の人の歌などを思ひ出でて、同

花に寄せたる人の心

じ花に向へば、さも其の人と對ひて語りあふ心地もするなり。花に寄せたる人の心は、今のも昔のも懐かしうこそ。

— 婦人畫報 —

景觀

二三 植物と氣象との關係

植物の景觀と自然の氣象との間には、自らなる關係ありて、互に相依り相扶けて、以て此の宇宙の美を現出するなり。故に晴、雨、雷、風、雲、霧、露、月等の、さまざまの氣象に對する植物の景觀に注意すれば、誠に面白き趣あるものなり。

春の日の霞たなびきたる中に、山櫻の咲亂れたるは、誠に趣深きものにして、其の調和の美いふべからず。今假に此の

櫻花をして澄渡れる秋の空に開かしめば、いかなるべきか。恐らくは其の優美艷麗なる特性は、十が一をも現ずること能はざるべし。また春の野の霞に罩められて、をち方の山々は淡き紫色に匂ひ、紫雲英、蒲公英などの一面に咲亂れたる中に、蝶、蜂などのおとづれ來て、心地よげに飛狂へる光景は、よく花曇の日和と和して、誠に長閑なる心地せらる。

新緑の候となれば、快晴の日にも、空氣は水分を含みて、何となう夕立の雲起り來べきかと思はるゝものなるが、其の青き空に、緑滴らんばかりなる竹樹の枝さし交したるは、其の配合ことに妙にして、人をしてそゞろに夏の面白きを感じしむ。

清曉
雪に傲る

やがて晩秋の節となれば、空氣清らかになりて、遠きあたりまで見やらるゝに、槭樹、公孫樹などの霜に色づきたるが、夕日に映えたる様など、又いひ難き趣あり。冬の末より春の初にかけては、寒さ厳しき清曉に、梅、臘梅などの雪に傲りて、いち早く咲出でたるは、氣高く心地よきものなり。

幽情

雨の面白きは、燕子花、花菖蒲などの咲出づる梅雨の頃なるべし。降るかと思へば晴れ、晴るゝかと思へば又降出でて、其の度毎に花の艶麗を増すなど、人をして限りなき一種の幽情を催さしむ。殊に此等の植物の花弁と葉とは、自ら雨を防ぐやうに作られたるを以て、雨滴は其の上に小さき玉水となりてとゞまれるが、其の美しさ誠に形容し得べくもあ

驟雨

らず。

驟雨などの烈しき雨にも、亦自らなる植物の配合はあるなり。それは多く雨滋き地に生育せる植物、又はさる地より移し植ゑられたる植物にして、かの梧桐の如きは其の一例なり。其の直立して膚青き幹、其の淺く切れ込みたる廣き葉の、一は新に洗はれて、一入鮮緑の色を増し、一はばら／＼と音を立て、其の葉末より餘滴をしたゞらする光景は、よく此の植物のかゝる急雨に適せるを見るべし。

餘滴

蓮の葉も亦雨を受くるに適せるものなり。それは葉の表に一面に天鵞絨のやうなる細かき突起ありて、其の間に空氣を含むをもて、雨に遭ふとも少しも濡るゝこと無ければな

り。かくて又其の空氣はよく光線を反射するを以て、葉の上にとゞまれる玉水をして、一種銀色の光を放たしむ。芋の葉も殆どこれに等しき構造をなせり。

秋雨に就きて聯想せらるゝ植物は少からざれど、まづ人の心をひくは芭蕉なるべきか。秋も末になりて、其の葉の破れ、筋の現れて、見るからはかなげなるに、寂しき雨のうち瀝ぎたる、人をして殆ど蕭條の氣に堪へざらしめんとす。

松は特に雨に適せる植物にはあらねど、其の雨に沾ひて、細き葉の束ねたるやうになりて、少しうつむきつゝ雨滴を滴らするさまは、又しめやかなる趣なきにあらず。

雪は寒國のものなれば、これに適するは寒地の植物なれ

はかなげ

しめやか

魁偉
清楚
ありて、共に賞すべし。

風
はなからずや
ど、暖地の植物にも亦これに遭ひて、面白き景色を見するものあり。かの常磐木の類、例へば樅、杉、松などの類の濃緑なる葉の、純白なる積雪の下より露れたる、又南天燭の赤き實の其の間にほの見えたる、共に色彩の配合上見棄て難き美觀なり。又松の其の魁偉なる枝もて、竹の其のしなやかなる枝もて、積雪の重みに堪へたる様は、一は豪壯、一は清楚なる趣ありて、共に賞すべし。

風の趣も亦すて難し。そよ吹く風の草木を渡りて優しき樂を奏する、木枯の落葉を吹捲きて、凄じき音をたつる、共に興なからずやは、殊に野邊の芒、水邊の蘆の秋風に戦げる趣は、秋の風物の最もあはれ深きものなるべし。又秋の夕澄渡

れる空に、一點の雲も無く、さしたる風の渡るとも見えぬに、樹々の梢のそよ／＼と打戦ぐは、いひ知らぬあはれの籠るものなり。

松濤
松籟

松濤、松籟、亦一入の趣あるものなり。平地は風吹くとも覺えぬに、松の梢のひとり美妙なる樂を奏し出づるは、誠に何の音ぞと怪しまる。古來幾度か詩人の吟詠に上りつらん。

奇し
雲の峯

雲は四時を分かずをかしきものなり。春の山にたなびきて花かと思紛ふ白雲、夏の空に奇しく崩れかゝれる雲の峯、秋の野に飛迷ふ薄雲、いづれも皆とり／＼のあはれ籠れり。又、冬の日、かの木曾、日光あたりの樅、梅、落葉松などの生ひ茂れる高山を深く立罩めたる凍雲は、誠によく幽邃の趣をあ

凍雲

らはすものなり。

霧は高原に多きものなれど、平地、平原にも亦全く無きにあらず。夏の頃、朝霧の立ちたる時、杉、樅などの常磐木の見え隠れするさま、田、沼、湖水などの一面に罩められたるさま、亦一種の風趣あり。

歎冬

露は夏、秋に下るものにて、朝夙く起出でて、叢の間を行かば、其の葉毎に美しくして、恰も白玉の如くなるを見ん。殊に稻、蘆などのやうなる禾本科の植物、又歎冬などの葉の縁なる露は、規則正しく置けるを以て、其の觀頗る美なり。

月は季節によりて、其の觀一ならず。春の夜は曇勝にて、朧月多し。世には此の朧月に夜櫻を配して、得難き美景なりと

(一) 敷島の和心を人とはば、朝日に句ふ山櫻花。(本居宣長)

(二) 疎影橫斜水清淺。暗香浮動月黃昏。(宋) 林逋

適くとしてよからざるなし

いふ者もあれど、かの朝日に句ふ山櫻の、優美にして壯快なるには比すべくもあらず。夏の月は之に反して、頗る快活なるものなり。殊に雨過ぎし木の葉、草の葉に映じたる月光は、いひ難き涼味を生ぜしむ。中秋の満月は空に冴えて、其の光誠に常と異なるは人のよく知る所なり。

月夜に適せる植物は、餘り多からず。かの暗香の浮動を賞すべしといひならはせる梅なども、其の花の美観は、なほ晝間を以て勝れりとす。されど一面よりいへば、取出でてこれといふべき好配合の無きは、たま／＼以て、適くとしてよからざるなき月の美質を示せるものにして、松の月、柳の月、梧桐の月、皆とり／＼のあはれを具へざるはなく、さては秋野

景致

の満月、夏山の曉月など、いづれも他に求め難き景致を具ふるにあらずや。——三好學植物生態美観による——

二四 愛すべき夏

徳富猪一郎

煩熱

涼自ら到る

夏の愛すべきは涼味に在り。人間煩熱に苦しむ時に於て、山深く樹密なる處に遊ぶ。此の時に於ては、風吹かずとも、涼自ら到る。己に涼味の愛すべきを知らば、炎熱も亦愛すべし。何となれば、炎熱の苦しむべきを覺えてこそ、始めて涼味の愛すべきを感じればなり。涼味の眞價を發揮するものは、それ炎熱に非ずや。念頭是に到らば、亦是炎熱の賜をも拜謝せざる可からず。

念頭

涼風一陣

夏の愛すべきは風なり。春風は温なり。秋風は冷なり。冬風は殺なり。夏風に到りては、すべて此等のものを調合したるものにして、纔かに「清」字を下し得るのみ。試に幽窓を開けば、涼風一陣、緑樹の間を吹來る。此の時に於て一の帝國を擧げて吾人に與へんとすとも、殆どこれに向つて易ふ可からざる快感を生ず。

夏日の愛すべきは黄昏なり。^(一)樂みは夕顏棚の下涼の古歌、説出して復餘蘊なし。何等の無邪氣なる快樂ぞ。而して更に愛すべきは宵なり。殊に月宵なり。^(二)月見れば千々に物こそ悲しけれ。とは、畢竟秋月に對して言ふなり。夏月に至りては、大月盆の如く、盤上の西瓜と其の大を競うて、松間より洩來る。

^(一)樂みは夕顏棚の下涼、男はてら女は二布して

餘蘊

^(二)月見れば千々に物こそ悲しけれ、我が身一つの秋にはあらねど、大江古今集千里

荷花
拍々然
翠蓋
宛轉

殷々

此の時に於て子女父老團欒して笑語す。亦是人生の至樂にあらずや。

夏の愛すべきは晨なり。荷花の拍々然として開き、其の幽香を洩し、露、水晶の如く其の翠蓋の上に宛轉たるを見れば、仙界我を距る遠からざるを覺ゆ。或は早起して庭上を歩す。仰ぎ視れば曉星天に在り。俯して視れば牽牛花二三、夢の如く籬邊を綴る。人此の時に於て一箇の罪念を容るべき地なし。

夏の愛すべきは驟雨に在り。殷々たる雷車天外より轟き來り、電一閃又二閃、天外より銀箭飛來るは、あたかも關東勢が楠公の藁人形に向ひて射下す箭よりも急なり。雷激し、雨

高天厚地

激し、風も亦激す。高天厚地、殆ど合圍の如し。此の時に於ては
恰も天河を翻し來りて、人間の煩熱を洗ふものの如し。須臾
にして雷歇み、風歇む。七色の長虹は上帝の佩びたる勳章の
如く、天の一方より地の一角に横たはる。此の時の快亦言ふ
べからず。言ふべからざるに非ず、言ふ能はざるなり。

二五 狂歌

ふじの山夢に見るこそ果報なれ

路銀もいらす草臥もせず

鯛屋貞柳

四方赤良

(一)大阪の人。本名國並善八。油煙齋と號す。享保二十年(二三九五)歿。
(二)幕臣。本名大田草。南畝又蜀山人と號す。文政六年(二四八三)歿。年七十五。

さわらびが握拳を振上げて



四方赤良筆蹟

山の横つらはる風ぞ吹く

郭公なきつるあとに呆れたる

宿屋飯盛

歌詠は下手こそよけれ天地の

動き出してはたまるものは

朱樂菅江

天の原月すむ秋をま二つに

ふりわけ見ればちやうど仲麿

鹿津部眞顔

(一)江戸の人。本名石川雅望。天保元年(二四九〇)歿。年七十八。
ほと、ぎす
鳴きつる影
は見えねど
もきいた證
は有明の
月
蜀山人
(二)江戸幕臣。本名山崎景實。寛政十二年(二四六〇)歿。年六十三。
(三)江戸の人。本名北川嘉兵衛。狂歌堂と號す。文政十八年(二四八五)歿。年七十九。

(一)江戸の人。田安家の士。本名小島源之助。享和二年(一八一六)二月に歿。年六十。

(二)江戸の儒者。本名立松東蒙。寛政元年(一四九九)年六月十四日歿。年六十四。

(三)京都清水寺。

(四)江戸の人。本名岸宇右衛門。寛政八年(一四九六)年七月に歿。年七十。

あらしはぬ風の柳の絲にこそ

勘忍ぶくろ縫ふべかりけれ

唐衣橘洲

菜もなき膳にあはれは知られけり

しぎやき茄子の秋のゆふぐれ

平秩東作

ゆく春を思ひきれとや舞臺から

飛んで見せたる清水のはな

つむり光

ほととぎす自由自在にきく里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里

(一)江戸の狂歌師。

木端

世の中を何のへちまと思へども

ぶらりとしてはくらされもせず

二六 十訓抄と著聞集

一 都良香

都良香竹生島(一)に参りけるに、眺望心(二)にすみて、三千世界眼

前盡(三)といふ句を作りて、其の末を案じ得ざりければ、靈天託

宣を下して、十二因縁心裏空(四)と、一句加へ給ひけり。

同じ人羅城門(五)を過ぐとて、氣霽風梳新柳髪(六)と詠じたりけ

れば、樓上に聲ありて、氷消浪洗舊苔鬚(七)とつけたりけり。良香

(一)儒者。初名言道。文章博士。元慶三年(一五三九)歿。年三十六。
(二)琵琶湖の北部に在り。
(三)平安京の正南門。

菅原道真。
自讃

菅丞相の御前にて、此の詩を自讃し申しければ、下の句は鬼の詞なり。」とぞ仰せられける。(十訓抄)

二 能因法師

(一) 歌僧。後鳥羽天皇頃の人。

感應

(三) 三島神社。伊豫國宇摩郡三島町にあり。

能因入道、伊豫守實綱に伴なひて彼の國に下りたりけるに、夏のはじめ、日ひさしく照りて、民の歎あさからざりけり。神は和歌に感應し給ふものなり、試に詠みて三島に奉るべき由を國司頻に勧めければ、

天の川苗代水にせきくだせ

あまくだります神ならば神

みてぐら

と詠みて、みてぐらに書いて社司して申し上げさせければ、炎旱の天俄に曇り渡りて、大いなる雨ふりて、枯れたる稲葉

(一) 太宗のこと。貞觀は太宗の年號

おしなべて緑に復りにけり。忽ちに天災を柔ぐる(一)こと、唐の貞觀の帝の蝗を吞めりける故事にも劣らざりけり。

この入道は至れるすき者にてありければ、

都をば霞とともにたちしかど

あきかぜぞふく白河の關(二)

念なし

と詠めるを、都にありながらこの歌を出さんこと念なしと思ひて、人にも知られず久しく籠り居て、色黒く日にあたりなして後、陸奥國のかたへ、修行のついでに詠みたりとぞ披露しける。(古今著聞集)

三 鳥羽僧正

鳥羽僧正は近き世には並びなき繪かきなり。法勝寺の金

(二) 名は覺猷。齋の名手。延六年(一〇八〇)寂。八十八年保元

鳥羽法皇
入興

堂の扉の繪かきし人なり。いつ程の事にか、供米の不法の事ありける時、辻風の吹きたるに米の俵を多く吹揚げたるが、塵灰の如くに空にあがるを、大童子法師ばらが走り寄り、取りとどめんとしたるを、さまざまに面白う、筆を揮ひて書かれたりけるを、誰がしたりけん、その繪を院御覽じて御入興ありけり。その心を僧正に御尋ありければ、餘りに供米不法に候ひて、實の物は入り候はで、糠のみ入りて軽く候ふ故に、辻風に吹揚げられ候を、さりとてはとて、小法師ばらに取りとどめんとし候がを、かしよう候を書きて候。と申されければ、比興の事なりとて、それより供米の沙汰厳しくなりて、不法の事なかりけり。(古今著聞集)

比興

京都の東北隅、京極土御門殿の中に、寛仁二年道長東大寺建立し、擬して壽院と稱せり。

玉の臺

龍頭鷯首
極樂淨土

二七 平等院

昔藤原道長の建立した法成寺は、善盡し、美盡し、磨き立てた御堂の板敷は、鏡のやうに人の姿が映つたので、一人の尼法師は、

くもりなくみがける玉の臺には
塵も居がたきものにぞありける

と詠んだ。場所は平安城の東方、四町の構の中に、七堂伽藍を建列ねた美々しさ。池は賀茂川の水を引いて、龍頭鷯首の船が浮いて居る。宛ら極樂淨土もかうであらうと思はれる有様であつたが、今は跡形も無い。此の時代の繁華を語り、美術

の精神を示すものとしては、唯宇治の平等院があるばかりである。

しかし平等院も昔の壯觀は半ば無くなつた。昔は南にも大門、西にも大門、築地が四面を取圍んで、其の中には多くの堂塔伽藍があつたが、一つ滅び、二つ廢れて、僅かに残つたのが阿彌陀堂、即ち現に鳳凰堂といふのがこれである。棟は高く空に聳えて、右左の翼廊と共に、鳳凰が飛翔して居る姿をなして居る。

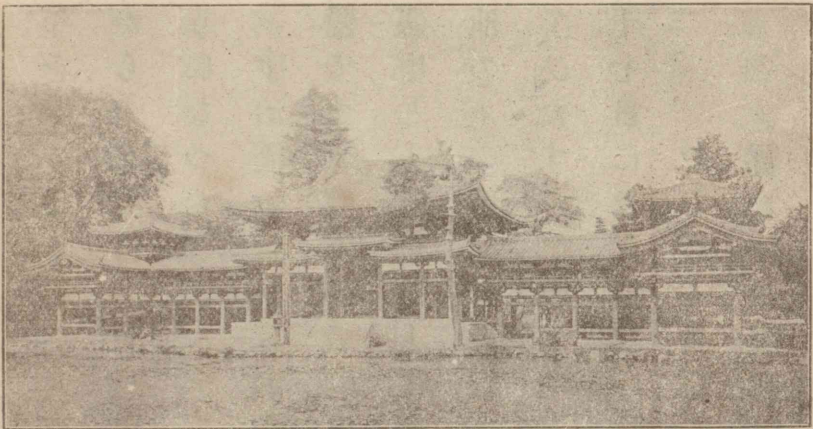
内陣の阿彌陀如來は、當時第一の佛師定朝が、一刀三禮、精神を籠めて刻んだ佛、丈が一丈六尺、裝飾は畫家藤原爲成の筆、極樂淨土の圖で、扉の繪の色紙形には觀無量壽經の文句

内陣 一刀三禮

(一)京都七條に住せり。法成寺の佛像も此の人の作。有名なる源慶、湛慶は此の後、繪所長者となり、速畫にて有名。後一條、後朱雀天皇頃の人。

(一)太政大臣師房の子。政治に達し、文才あり。書をよくす。保安二年(一七八二)歿。年八十七。

(二)嵯峨天皇の皇子。寛平七年(一五五五)歿。年七十四。



が書いてある。これは當時の書家堀川左大臣源俊房の書であるといふ。

平等院はもと河原左大臣源融の別荘であつた。此處へは陽成天皇、宇多天皇、朱雀天皇の行幸あらせられた事もあつた。それを道長院が買取つて、子の頼通に譲り、頼通が更に造り直して、寺としたのである。これが後冷泉天皇の永承六年、頼通が六十歳の時で、大正十一

年を距ること實に八百七十二年である。伽藍が出来上つてから十七年目、治暦三年十月十五日、後冷泉天皇がこゝに行幸になつた。

宇治橋の詰から御船に召されて、樂人が奏する樂の音を愛でつゝ、漕上つて御出でになつた。頼通は心を盡して御待遇申し上げ、川の上には錦繡を飾り立てた棧敷をしつらへ、池の上の唐船には樂を奏し、御前の物には金銀珠玉を飾つて、ひたすら御慰め申し上げた。十六日は雨で御還幸も延び、十七日には又詩歌の會を御開きになつた。其の時天皇は、

忽ち看る鳥瑟三朝の朝
暫く駐る鸞輿一日の蹤

錦繡

と、時も時、めでたく御作り遊ばされたのであつた。

二八 税所敦子君の棺の前に誄す

高崎正風

嗚呼、税所刀自逝きぬ。我が無二の友たりし掌侍正五位税所敦子君逝きぬ。忠孝慈貞なりし君が前半生の行狀は、鹿兒島士民の普く知る所、其の後半生の名譽は、輦轂の下にかくれなし。然れども前後に通じて、よくこれを知悉せるは、蓋し正風ならん。正風が歌によりて始めて君と相見しは、君が齡三十に垂んとせし時にして、正風が年十九の頃なりき。相見しは、歌によると雖も、仰ぎ慕ひしは君が高節によれり。

掌侍

輦轂の下

知悉

垂んとす

高節

繼室
嬰兒

君は正風と藩を同じくして京都に勤務せし税所篤之氏
が繼室となり、嬰兒を懷にして、不幸にも夫に訣れたり。嗚呼、
君は京都に生れ、京都に成長し、京都にて結婚せし優美艷麗
なる婦人なりき。當時鹿兒島の風習たるや、同郷人のほかは
他所者として之を賤しみ、其の姑の如きも、京女の新に來り
て同居することを快しとせざりしにも拘らず、君は正當の
理に循ひ、自ら奮ひて遼遠殆ど外國の想ある鹿兒島に歸り
て、其の姑に事へき。嗚呼、尋常の女子ならんか、夫の携へ歸ら
んとするも猶難色あらん。否、離婚をも請ふなるべし。君が己
に克つ勇氣に富み、志操の秀拔なりしことは、これを以ても
知らる。況や京都より齎し、衣服調度の美なるものは、擧げ

遼遠

難色

粗敵

下物

杖柱とも憑
む

(一)鹿兒島藩主
島津齊彬
保傅

取絶る

て之を前妻の出にして鹿兒島にありし女に與へ、身には粗
敵を纏ひ、日夜老いたる姑を看護し、其の酒を嗜むを見て、手
づから下物を調理して口腹



税所 敦子
に適せしめしかば、嘗て君と
同居するをだに厭ひ嫌ひた
りし姑は、いまだ月を累ねず
して、忽ち君を杖柱とも憑む
に至れり。

(一)國君順聖院公之を聞き、世子の保傅とし、親しく行爲を觀
察して、大いに喜びて曰く、「われ人を得たり。」と、世子夭す。君悲
歎に堪へず自刃して殉せんとす。姑取絶りて泣きて曰く、「わ

れ今御身を失はば、何を樂しみてか此の世に生殘るべき。」と君之が爲に止りぬ。

正風嘗て君に就きて歌談を聽く。訪ふ毎に一婢ありて君が傍を離れず。又正風が詠草を返附せらるゝ毎に、必ず正風が母、若しくは姉にあてゝ送らる。當時正風迂疎にして其の何の故たるを解せざりき。後に思へば、嫌疑を遠ざくる用意の周到なりしなりけり。嗚呼、忠孝慈貞誰かこれに加へん。後久光公の女香蘭夫人、近衛忠房公に嫁せらるゝや、君扈して東上して老女となり、下僚を遇すること慈愛を極めたりき。明治八年に至りて、坤宮女流の人才を徴し給ふ。正風薦むるに君を以てす。君、順聖公の恩に感激し、近衛家を去るに忍

迂疎

周到

(一)齊彬の弟。

遇す

坤宮

大義名分

質疑

蒲柳の質

名所岸
萬代の根ざ
しのかためし
松が枝のゆ
は波にもゆ
りがざりけ
り敦子

(一)明治天皇。

びず。正風説くに大義名分を以てして、君始めて命を奉ぜり。爾來、兩陛下御文學の諸務を掌り、御製御歌の拜寫を始め、同僚、宮女の爲に百事の質疑に應ずるまで、日夜安息に暇あらず。君もと蒲柳の質、しかも公事に服しては毫も攝養を意と

税所敦子筆蹟

せず、往年大いに病む所ありき。

天皇陛下、君が年老いて勤勉の過度なるを憐み、家居して適意に出仕せしめんとし給ひ、特に正風をして内旨を傳へしめ給ひしが、君安んずること能はず、平素厭嫌せし牛乳を

鞅掌するこ
と故の如し

服して氣力を養ひき。癒ゆるに及びて宮中に入り、鞅掌すること故の如し。

文豪

三寶に歸す

嗚呼、君が八百年以來唯一人の女文豪たりしことは、世人皆之を知る。君夙く三寶に歸し、慈善を好むこと飲食よりも甚だしく、我が彰善會の起るや、最も熱心なる賛成者として、金員を寄附せらるゝこと屢なりき。君去んぬる一月五日、正風が病床を問ひて告げて曰く、明年七十七、所謂喜字の齡たらんとす。聊か自ら壽すべし。と。正風大いに之を賛し、爲に盛大なる宴を張り、朝野の詞藻を蒐集せんと期したりしを、今はつひに全く畫餅となりぬ。

畫餅

詞藻

喜字の齡

正風今かくの如く忠孝慈貞なりし無二の友を喪ひ、身病

慟哭

褥に横たはりて、葬場に會することを得ざるは何等の慘ぞ。何等の痛ぞ。豈慟哭せざるを得んや。病を力めて此の誅を草し、兒元彦をして代讀せしむ。嗚呼、悲しいかな。

自修文

二九 春の七草と秋の七草

正月七日に七種の粥を祝ふこと今も尙行はる。元は支那の風俗より出で、此の日に若菜を食へば、邪氣を除き病難を受けずといふ信仰より來れり。古より用ひ來りし菜の七種を春の七草といふ。芹、薺、御形、はこべら、佛の座、すずな、すずしろこれなり。芹は日常の食用品なれば、知らぬ人なかるべし。薺は葉は蒲公英の如く春の初小さき白花を着け、後細かなる莢の實を結ぶ。其の實三味線の撥に似たれば、俗にぺんぺん草といふ。御形は俗にいふ餅草

(一) 芹なづな御
形はこべら佛
の座すずな
すずしろこれ
ぞ七くさ
(増補題林集)

秀句巧に引つ た言葉つ と見とを 恨みけ
添ふふめりの ふけたのないい
添ふふやうて
ある。

思ひなしに

檐の玉水

りて一入のあはれさも添ふめり。朝顔には數説ありて一定せず、
今いふ朝顔なりとの説もあれど、一説には桔梗ききやうの花なりともい
へり。

三〇 秋 夜

幸 田 露 伴

秋の夜をうら悲しきものには、古より言ひならはしたり。
實に春の夜の、月朧に風和ぎて、鐘の音なんども思ひなしに
や、長閑に緩く渡るやう聞ゆる頃の様子には似るべくもあ
らず。また月無く空暗くて、小雨しめやかに降る夜も、春は檐
の玉水の音さへ憎からで、燈火の光、取散したる机のまはり、
茶碗、小土瓶、灰皿なんどもやさしく浮きて、身を寄する柱の
吾が背にあたり加減にすら、言ひ難き懐かしさあり。

端居

埋火

さび

秋は甚だしくこれに異なり。晝の暑さの、夕風に稍去りて、
露降る星の夜のいさぎよきに、小庭の闇を賞しつゝ、縁先の
端居を樂しむ夏の風情も亦同じからず。まして窓打つ時雨
の音、或は雪の聲などに、外面の景色を思ひやりながら、座蒲
團の温みに泥みて、埋火の假の情も振棄て難う、雄心も無く、
はかなき草子などに讀入る冬の夜の趣は、似通ふ所有るが
如くにして、實は大いに異なり。秋は晝よりも夜こそをかし
けれ。されど其の夜の趣、春の夜のやはらかみ有りといふに
も無く、夏の夜のいさぎよさ有りといふにも無く、又冬の夜
のさび有るにもあらず。唯秋の夜は自らこれ秋の夜にして、
必ずしも心悲しとのみにはあらざれど、強ひて言はんには、

なほしか言はんより外に、辭も無かるべきにや。

夕汐に風取りて、青く澄みたる大空に、白き雲の絹綿を薄く引きたる如くなるが立ちたる儘、入日の光、少時の花やかさを見せて、忽ち手元暗くなれる靜かなる秋の暮の、夜に入りては大抵星高く空深くして、芋の葉の露、菽の葉の露、萬物に音無く、唯露の落つるなり。かゝる夜をこそ我が世とは思ふらめ。蟲の聲々競ひ立ちて鳴くは、聞く耳にも清々しく、爽なる限りなれど、憂ある人の寐られぬなんどいふも、ひたすらに氣のみ澄みて物の靜かなる、かく晴れて而も穩なる時の事なるべくや。假初の物音も響き渡りて、隣家の厨のことこと、吾が屋の鼠のこそく、さては熟みきつておのづと落

蠹餘

執し思ふ

ちたる柿のけたましましきなど、皆かやうの夜の景物にて、燈も瞬かぬ午前二時頃、偶、古人の詩歌の字眼光を放ちて、蠹餘の紙上に起つて舞ふ姿の、今猶若く健かなるを見なんどする事あれば、それより其の人いたく秋の夜を執し思ふに至るとかや。

蔓の浪間

月の夜は秋こそ勝れたれ。春の月の光は美しき女の童の髪のごとし。めでたきことは誠にめでたし。懐かしきことも誠に懐かし。冬の月は水晶もて作れるものを見るがごとし。清らさは餘りありて、味無きに近し。夏の夜の月の團々と大きなるが、海原のはてより、松の樹の間より、又は市中の蔓の浪間より出でたる、いづれも目ざましく心ゆくものにて、夜

かすけく
(一) 春水満三四
澤夏雲多奇
峯秋月揚三明
輝冬嶺秀孤
松陶淵明

窓櫺
月天心を過
ぐ
光華六合に
彌る

の景色も快くをかしけれど、たゞ我が魂の世に浮るゝをこそ覺ゆれ。天地の靈氣の身に浸入るやうなるを覺ゆることなし。秋は夜面白く、夜は月面白し。中の秋の五日、六日の月のふと見る夕暮の空に出で居りて、雑木の梢もろこしの垂葉なんどに、風かすけく囁く、まづ面白し。遠山黒く暮れて、素月輝を揚げ、庭樹のそれく、濶葉織葉の葉表の照、葉蔭の闇、おのがじし畫趣を爲し詩情をつくりて、合して爽涼清澄の景を醸し出すさま、いづくにも有りふれたることながら好し。夜更け蟲吟じて、世の中靜かなる時、たま／＼燈前に書をさし置きて、起つて廊を歩む。因に、窓櫺の白きを見て、戸を推開きて出づれば、月天心を過ぎて、光華六合に彌り、霜に澄める

(一) 雪の日やあ
れも人の子權
ひるひし(安
藤冠里)

すがれの蟲
の音

夜の氣は水將に凍らんと欲するがごとくなる、身心頓に此の世のものならずなりたるやうに覺えて、秋ならでは、夜ならでは、月ならではと思はる。二十四五日までならずとも、二十日過の月を曉に觀たるまた好し。宵の酒いさゝか過ぎて、曉天夙く目覺めたるに、腔内なほ熱して口渴を覺ゆるまゝ、(一)これも人の子なれば、奴婢を煩はさんもをかしからぬ心地して、獨り外に出で井の本に立寄る折柄、朝霧淺々と罩めて、星弱々と消残れる天のかなたに、秋とはいへど、力無き月を見たる、なか／＼面白し。聊かの竹むら、草むらの根方などは、猶稍闇きに、すがれの蟲の音かしがましからず。淺葱に明行く空吹く風の冷かに、領うりに落つる、譬へん方なく胸涼しく

漣
糟臭く腥し
我から我を
疎み心

覺えて、酒に黄金の漣を興じ、膾に銀絲の美しさを賞せし昨夜の筵も、たゞ糟臭く腥くして、浮世の垢を嘗めしには過ぎざりけるをと、少しは我から我を疎み心になるも、秋の興ふる智慧といふものなるべきにや。

孤篷

舸舫

心頭の状
融合

秋よし、夜よし、月よし。舟にして之を味はふ、最もよき様なり。大江露に更けて、天地月に白む時、孤篷に身を埋めて、隱洲の洲垂に泊れば、流水微しく舸舫に激して、船底に玉琴の鳴るを聞くが如く、兩岸夢より淡くして、渚の葭の黒みも、楊の丸みも、唯一様に一刷毛の墨と淡く暈み、人語と世塵とすべて皆到らず、詩情と茶趣とたゞ双び在るをかしさ、何とも言ふべくもあらず。寂として、心頭の状と眼前の景と共に融合

江心夜泊

せんとする時、余吾鷺のふはりと下りて、羽づくろひして、臚に寐たるなんと、江心夜泊の實を味はひたる人にして、後其の趣を知るべきのみ。
東亞之光

淑女

三一 淑女とは何ぞ

三宅雪嶺

詩經の開卷第一に、「窈窕淑女、君子好逑」とあるは、淑女の語の由つて來た所であつて、其の君子と相對すること、レデーのゼントルマンに於けるに似てゐる。漢學の盛な時代には、教育ある者は皆此の句を口にして居つたが、現在の日本では、もはや君子といふ語が多く行はれず、其の代りに紳士といふ語が行はれ、而して女性の之に對するものは舊のまゝ

紳士

淑女である。紳士といふほど廣く行はれぬにしても、確かに之と對になつて居る。

併し紳士といふ語は廣く行はれて居るだけ、其の何たるかも知れ渡つて居るが、淑女といふ語は少しく明白を缺く。彼は紳士であるといへばすぐ分り、彼は淑女であるといへば聊か分りにくい。淑女とは何の事であるか。分つた様であつて判然せぬ。之に相當する外國語もさうである。ゼントルマンの何たるかは分りきつて居るやうに感ぜられて、レデーの何たるかは幾分の疑を免れない。是は、男は世間に活動し、世間の風波に揉まれて、實相が分つて來たが、女は幾分か裏面に潜み、分りにくくなつて居るからである。ゼントルマ

實相

ンもレデーも元來貴族の尊稱に用ひたのであるが、ゼントルマンの方は、今では位置の如何よりも品性に重きを置き、貧乏して居つても、品性が高ければかく名づける事になつて來た。レデーの方もかくあるべき順序であらうが、今なほ品性の如何を問はず、唯位置に拘つて居るのは、社會の未だ進歩しないことを示してゐる。

衣食足つて禮節を知るといふから、衣食の計は大切であるにしても、世には衣食の外に爲すべき事が多い。或は衣食の計を考へず、唯發明に汲々としてゐる人もあるから、世間に益を與へるのは、富んでゐる人と貧しい人と孰れが多いかは決するに苦しむ。ゼントルマンといふ語が、廣く行はれ

(一)管子の語。本
卷一四課を見

るやうになつたのも偶然でない。レデーも亦さうあるべきである。

ところが、男には貧しい生活をしてゐても立派な者もあるが、女にはさういふ者が尠い。中には見上げた者があるにしても、大抵は生活が貧しければ心も貧しい。紳士の語が上流、下流を通じて行はれつゝ、淑女の語が下流に當てはまりにくいやうに感ぜられるのは、其の邊からでもある。

併し上流、下流といつて判然分れて居るものでない。我が國でも、十年間に無爵から侯爵になつた人もある。金の點からいへば、俄に金満家になつた者も珍しくない。社會の動搖して居る時に、表面上の階級で人の品位を定めると間違を

生ずる。どこまでも其の人の人格に重きを置くやうにすべきである。幾ら豪奢を極めても、品性の下劣なのは紳士でなく、幾ら粗末な服装をしてゐても、品性の高い人は紳士である。華族でも富豪でも、心の貧しい女は淑女といへぬ。却つて百姓家や漁師町に褒むべき女を見出す事がある。上流に比較的淑女らしい者があるにしても、一概に淑女とは上流の婦人ときめる事は出来ぬ。

如何なるが淑女であるといへば、大僧正(一)ニューマンがゼントルマンに就いて言つた所は、寧ろ淑女に當てはまつて居る。ゼントルマンは何人にも苦痛を與へぬものである。人の困る様な事をせぬ。弱い者を勞り、羞づかしがる者に優し

Neuman.
英國の人。(西
曆一八〇〇—
一八九〇)

温良恭謙讓

くする。萬事控へめにする。人に施すとき貰ふやうにする。」といふやうな事をいつて居る。一口にいへば、温良恭謙讓であるが、此のことは紳士に向つてよりも、寧ろ淑女に向つて望ましい様に思ふ。下流にあつても、かゝる品性を備へて居る者は、宜しく淑女と看做すべきである。君子、淑女といふ語は、初から貧富に關係がない。貧にして君子たり、淑女たるに少しも妨はない。ゼントルマン及びレデーといふ語が、初め貴族を指して、漸く品性に重きを置くことになつたのとは違ふ。これは支那が精神的文明に於て、西洋に先んじてゐた證據である。

淑女といふは誠に好い語である。三千年來傳はつて今尙

(一)詩經の開卷第一、即ち、窈窕淑女、云々の詩のある章。

新しきを覺える。レデーの貴族出なるに勝つて居る。君子の語は紳士に取替へられたが、淑女の語の取替へられぬのは歡ぶべきことで、淑女の語がどれだけ擴るかゞ懸念すべきである。現に紳士の語の行はれるが如く擴るであらうか、或は唯作文に使はれ、事實に於て廢滅に歸するであらうか。女性の品性が日に進まば、淑女といふ語も日に擴るべきである。此の語がどの邊まで行はれるかで、社會上に於ける女性の力を量る事が出来る。昔は年の始に關雎の詩を讀んだりした。今はさういふことが無いにしても、淑女の語が過去に消滅したものとすべきではない。君子と淑女との價值はとこしへに變ぜぬ。

三二 空行く雁

(一)兄曾我十郎祐成の幼名。
(二)弟曾我五郎時致の幼名。

いざさせ給へ。
(三)祐信。
(四)祐經。

頃は人皇第八十一代安徳天皇の養和元年、あらたまの年立歸りて、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕暮箱王は母の膝の上に戯れながら、いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。誠やらん、父の御事は佛になつてましますとや。其の佛は何國にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前、いざさせ給へ。といひければ、遙かに忘れたるさる方も今更思ひ出されて、消入るばかりなり。母泣く泣く宣ひけるは、あの曾我殿こそ己等が父にてあれ。と心強く語られけれども、涙に咽びて、陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、父御前は、誠やらん狩場より歸り給ふ道にて、工藤一

(一)源頼朝。

かりがね

人倫
和殿

藤とやらんに射られて死に給ひぬと兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿の切者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等が此の里にあるを知らでや過ぐらん。など大人しく語れば、母より始めて女房達まで、皆袖をぞ絞りける。かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びけるに、五つ連れたるかりがねの、南を差して飛行くを見て、一萬申しけるは、あれ見給へ箱王殿。空に飛ぶ翼も別の翼ぞ交へざりける。五つつれたるは、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。物言はぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生れながら、和殿は弟、我

は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我々より幼き者も、馬鞍、弓、矢を以て物を射ありく事の羨ましさよ。これらの事ども思ひ續くれば、いつもよりも今宵は父御前の戀しくおはしますぞや。とて、袖に顔を差入れてさめくと泣きければ、弟も小賢しく顔を合せて泣き居たり。一萬の乳母の女房之を聞きて、あなあさまし、人もこそ聞け。いかに和上藤たち夜も更けぬるに、さやうにはおはするぞ。とくく入らせ給へ。と恐ろしげにいひければ、二人の者は門外に逃出でて、思ふ

やうに飽くまで泣きて後に、内へ入りにけり。

其の後は、二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世になき父を慕ひつゝ、語り合するまではなけれども、唯目ばかりを見合せて、互に袖をぞ濡しける。或時兄弟は竹の小弓、薄矧の小矢を取添へて遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向ひ、あなたこなたに射通して、一萬箱王に申しけるは、我等もいつか成長して、和殿は十三、我は十五にだにもならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如く差合ひ、射取りて後には、ともかくもなりなん。和殿も弓をよく射習ひ給へ。我も射習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ。といひければ、弟も打領きけり。年ばへには恐ろ

しき事かなと人々思ひけり。

——異本曾我物語——

三三 交際と文學の趣味 三輪田眞佐子

凡そ女子の交際するに當りて、最も缺乏を感ずるものは話柄ならんかし。思ふに、男子は外事を掌るものなれば、自ら眼界ひろく、聞知することも亦多からん。されども女子は家門を出づる機會も少く、縱令相當なる社會の業務に従事する者なりとも、其の見聞の男子に及ばざるは事實なるを以て、通例の女子は談話數刻に至らんか、忽ち思想盡きて、言出づべき言の葉草は無かるべし。

言の葉草

話柄

毀譽
褒貶
……にこそ

樞要

宇内の美妙
韻致

者は戯れて笑ふに止るか、さなくば他人の身上を批評して話柄となし、辛うじて一座の興を維持する觀あり。されど戯れて笑ふは少女の時代には許すべくとも、既に人の夫人とも呼ばるゝ時代に於ては、譽むべきわざならじ。まして交際の話柄として、人を毀譽し、褒貶するが如きは、女徳を損ふこと最も甚だしきことなれば、固く禁ずべき事にこそ。

交際上樞要なる思想を養はんには、まづ文學を修むるに若くはなし。抑、文學は宇内の美妙を寫し、人情の韻致を載するものなれば、苟も文學思想あらんか、其のいふ所高雅なるをもて、他人の感情を害すること無かるべく、又誰か之に接してゆかしき思なからん。わきて春花秋月の折につけても、

金玉の聲

其の言錦繡の色あり、其の語金玉の聲あるべし。などが人の福を壽ぐに辭を誤らん。人の憂を解くに詞を失はん。

又文學の趣味ある人は品性高きを以て、門地低く財寶乏しくとも、高位高官の人と平等の交際を爲すことを得べし。又其の容貌愚なるが如きものありとも、文學の徳内に積るものありて、自ら外に現れんには、忽ち人をして敬愛の情を起さしむるに足らん。

昔一人の僧（一）法勝寺の櫻のもとに佇みけるを、若き女房四人打群れて花を賞しけるが、これを見て、かれも人なみに花見んとしてあるにや。と嘲りて、僧に向ひて、此の花一枝折りて給べ。といひたりければ、此の僧うち案じて、

（一）京都市東三條森の北三町にありしが、應仁以後廢亡。立河天皇の建白

山がりをりこそし
らね

山がつはをりこそしらね櫻花

さけば春かとおもふばかりぞ

蓄積

といひかけけり。之を聞きて、前に笑ひつる女房ども、答ふること能はずして、驚きて立去りけりとかや。かく僧を笑ひし者をして、反りて後の世の笑を招かしむるに至らしめしは、文學の蓄積ありしによりてなりけり。凡そ萬山皆花の候とならば、定めて三々五々打群れて花を眺むる少女もあらん、老婆もあらん。彼等には果して如何なる文學思想あるか。

茲に注意すべきは、いかに文學ある女子なりとも、われこそ風流なれ。といはんばかりの動作あるものは、眞の文學趣味ある女子といふべからず。唯々一見して表に一丁字も知

一丁字

方便
別事に屬す
三十一文字

らざるが如き舉止あり、内に文學の徳を備へたるゆかしき女子こそ望ましかれ。故に、交際に文學を必要とするは、思想を養はん爲に止りて、文學を方便として交際するが如きは別事に屬すべし。和歌を知らざる友に向ひて、三十一文字の話を試み、雅言を解せざる人に對して、俗語を用ひざるが如き事あらば、反りて人を耻ぢしむるに至るべし。最も戒むべき事にこそ。されば、己は「文學にて心を養へ」といふのみ。文學を口に談ぜよ。」とはいはざるなり。

— 女子日本讀本 —

改訂 女子國文卷五 終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。)

劍 剪 刃 函 滅 涼 準 況 決 冒 免 免 佞 佻 兩	通用正
劍 剪 刃 函 滅 涼 準 況 決 冒 免 免 佞 佻 兩	通用正
冤 墻 塚 場 噴 噐 唇 叙 収 厨 卿 鄉 即 効	通用正
冤 牆 塚 場 噴 噐 唇 叙 収 厨 卿 鄉 即 効	通用正
拔 拿 戲 懺 懃 慨 恒 徃 稟 屏 并 帽 尅 寶 寇	通用正
拔 拿 戲 懺 懃 慨 恆 往 廩 屏 并 帽 剋 寶 寇	通用正
濱 溫 冰 藏 欸 概 桿 晉 昂 既 整 攙 攙 攙 擯 插	通用正
濱 溫 冰 藏 欸 概 杆 晉 昂 既 整 攙 攙 攙 擯 插	通用正
盃 鼓 痴 畧 畱 畫 瑣 玄 貓 猪 猿 熔 陰 潛 濶	通用正
杯 鼓 癡 略 畱 畫 瑣 玄 貓 猪 猿 鎔 陰 潛 闊	通用正
續 續 紀 穀 粘 籤 纂 節 竝 竊 秘 頤 穎 稟 研	通用正
續 續 紀 穀 黏 籤 纂 節 竊 竊 秘 頤 穎 稟 研	通用正
厠 勅 冲 働 俟 京 亡 並 万 聲 耻 羹 群 罰 纏 織	通用正
廁 敕 冲 働 埃 京 亾 並 萬 媼 墻 恥 羹 羣 罰 纏 織	通用正
婚 姊 妍 妊 野 坂 嚙 叶 厮 同 艷 館 鋪 阜 致 腸 豚	通用正
婚 姊 妍 妊 埜 阪 齧 協 廝 同 艷 館 鋪 阜 致 腸 豚	通用正
考 慙 富 忘 庵 嶋 峯 峩 岳 解 弱 褒 衛 蔭 萌 莽	通用正
攷 慙 富 忘 菴 島 峰 峨 嶽 解 弱 褒 衛 蔭 萌 莽	通用正
概 稿 楫 棕 基 案 柿 村 普 賈 贊 賓 象 讎 讖 記	通用正
槩 槁 楫 棕 基 案 柿 村 普 賈 贊 賓 象 讎 讖 記	通用正
砧 睹 狸 貉 無 烟 汗 毘 朴 隸 隙 間 鎖 隣 輒 軟	通用正
砧 觀 狸 貉 无 煙 汚 毗 樸 隸 隙 間 鎖 鄰 輒 軟	通用正
緜 總 網 紕 紕 紕 紕 紕 稿 鬱 鬪 馱	通用正
緜 總 網 紕 紕 紕 紕 紕 稿 鬱 鬪 馱	通用正

附 錄

羈 羈 羈
 船 船 船
 櫓 櫓 櫓
 花 華 衽 衽 谿 通 遜 雁 鴈
 荒 荒 訛 譌 踪 蹤 鏤 鏤 鏤 雞 鷄
 虱 虱 譁 嘩 躑 躑 躑 鏤 鏤 鏤 雞 鷄
 本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラルモノ。其ノ中
 *標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從
 ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

巨 巨 巨
 體 體 體
 但 但 但
 僭 僭 僭
 胃 胃 胃
 恒ニ同ジ。
 笨ニ同ジ。アラシ、龐、粗。
 カラダ。
 タマシ、タマ。但馬
 ツタナシ、拙劣。
 ミダリガハシ、猥。
 身分ヲ越エテオゴル。「僭越」
 カブト、兜。「甲冑」
 ヨツギ、嫡子。又子孫。「冑裔」

託 託 託
 擔 擔 擔
 改 改 改
 鎗 鎗 鎗
 欠 欠 欠
 糸 糸 糸
 羨 羨 羨
 拓ニ同ジ。オス、ヒラク。
 ヨル、タノム、ユダマ、カコツク。
 ハラフ。又アゲ。
 ニナフ、カツク。
 鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
 アラタム。
 ヤリ。
 鐙ニ同ジ。鐘ノ聲ノ形容。
 アケビ。「欠伸」
 カク。「缺席」
 ホソイト、細糸。
 イト。
 支那ノ地名。
 ウラヤム。

協 協 協
 刺 刺 刺
 台 台 台
 臺 臺 臺
 后 后 后
 商 商 商
 壺 壺 壺
 姫 姫 姫
 カナフ、叶。
 オビヤカス、脅。
 サス。「刺殺。刺客。名刺」
 モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」
 星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。台覽。台臨
 ウテナ、ダイ。
 ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
 キミ。「皇后」
 アキナヒ。
 モト、本。
 ツボ。
 ミチ、宮中ノミチ。
 ツ、シム。
 ヒメ。

虫 虫 虫
 託 託 託
 詔 詔 詔
 證 證 證
 豊 豊 豊
 迄 迄 迄
 撰 撰 撰
 魚介類ノ總稱。又ママシ。
 ムシ。
 ワビ、ワブ。「詭狀」
 詭ニ同ジ。アザムク。
 ヘツラフ。
 ウタガフ、疑。
 アカシ、シルシ。「證明」
 イサム、諫。
 禮ノ古字。
 エタカ。
 マデ。
 ユク、行。
 エラブ。(ヨリトル)
 エラブ。(書物ヲ編纂ス)

卻^{グキ} 卻^{キキ}

鍛^カ 鍛^{ケン}

シヨロ、隙。
シリツク。「退卻」
キタフ。「鍛鍊」
シヨロ、「鍛」

宛 字

(左の如き字は假名を
使用するをよしとす)

おぼつかなし 覺束なし
かひ(證の意) 甲斐
きつと 屹度
さすが 流石、道
しまふ 仕舞ふ
せつかく 折角
だけ 丈
だめ 駄目
ちやうど 丁度
ちよつと 一寸、鳥渡

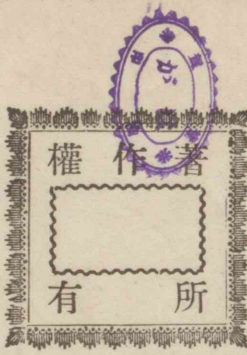
附 録 終

でたらめ 出鱈目
とうく 到頭
とかく 兎角、左右
とて、とても 迎
とにかく 兎に角
なか／＼ 中々、却々
ふるまひ 振舞
はかなし 果敢なし
ほんたう 本當
むだ 無駄
むづかし 六ヶし
やたら 矢鱈
やはり 矢張

大正六年十月二十七日印刷
大正七年十月三十日印刷
大正七年十一月九日訂正再版印刷
大正十年十月十八日訂正再版印刷
大正十年十月廿三日訂正再版印刷
大正十年十二月廿六日訂正再版印刷

改訂女子國文典附
定價
卷一—卷四、各金四拾錢
卷五—卷七、各金參拾八錢
卷六—卷八、各金參拾七錢

大正十一年度臨時定價
卷一—卷四、各金七十六錢
卷五—卷七、各金七十二錢
卷六—卷八、各金七十錢



編者 芳賀 矢一
發行者 兼 東京市神田區裏神保町九番地 合資 富山房
代表者 合資會社富山房社長 坂本 嘉治 馬
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社 秀英舎第一工場

發行所

東京市神田區裏神保町九番地 合資會社 富山房
電話神田三〇一四・神田三七六〇
振替口座東京五〇一番



唐島技藝女塾
専修科
大重竹
白